

清末小説から 133

2019.4.1

- いくたびかの阿英目録23……樽本照雄 1
『林紓訳文全集』について——全集モドキでボッタクリ……沢本香子 5
呉禱についての文娟論文……荒井由美14
陳大康『中国近代小説史論』の年表——『編年史』との関係で……樽本照雄24
《广肇周报》与林紓佚著《京华追忆录》……王 玉28
清末小説から14、33

★樽本『清末小説三談』は本研究会ウェブサイトで公開中です。陸国飛の翻訳小説目録について

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録23

樽本照雄

阿英が盗用をほのめかす

では「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件に気づいた最初の人はいだれか。

最初の人はい阿英であるらしい。どうしてもあやふやな書き方になる。「らしい」と書くのは阿英自身が明言していないからだ。

1941年の阿英「老残遊記校勘記」にさかの

ぼってもいい。しかし当時は盗用事件があることを知らなかった。阿英はさらに1955年にも言及している。前出、北京・通俗文藝出版社本『文明小史』だ。阿英は第59回に自分の手で削除した部分があると述べた。1,500字を削除したがその理由を書いていない。削除した部分には「北拳南革」批判が含まれる。北の義和団、南の革命党を非難する。両作品が同じ内容を書いているのは、劉鉄雲と李伯元のふたりともが同様の考えをもっていたというだけ。『繡像小説』発行遅延説が出てくるはるか以前のことだ。個人名を出してふたりの類似記述にするのはしかなかったか。

だが疑問に思う。同じ考えを表明しているならば、なぜ「文明小史」のその箇所を削除しなくてはならないのか。ここが阿英の行為、および彼が書いた解説が読者を納得させることができない理由だ。盗用を明記せず説明もなく削除したのは、中華人民共和国成立後の思想界において「北拳南革」を批判することは許されな

ったからだろう。立場上、義和団と革命党はあくまでも支持賛成絶賛しなければならないからにはかならない。

李伯元か、劉鉄雲か。どちらが似せたのか。あるいは盗用したのか。偶然の一致とは考えにくい。なにしろ「北拳南革」という単語が独特だ。ほかに類似の例を見ない。

李伯元の文章を削除したところを見れば、阿英は李伯元を犯人だと考えていたようだ。説明がないから推測するほかない。

盗用したとは明確に説明しない阿英だった。ほのめかしただけ。だとすれば盗用事件だとはっきりと指摘したのは1961年の魏紹昌になる。

『老残遊記資料』編集過程のドロドロ

以下の内部事情は、主として劉徳隆、朱禧編『也無風雨也無晴——滬榕書札』(2008)^{*74}によっている。『老残遊記資料』の刊行が1962年だった。劉厚沢の手紙が公表されるのは46年後だ。部外者にはうかがうことのできない関係者間の対立と葛藤があった。

『老残遊記資料』の編纂過程が複雑だ。編集方針が一定していないように見受けられる。それがわかるのは上の書簡集を読んでからだ。それより前に劉蕙孫がずいぶんとぼかして説明したことはある。前出『鉄雲先生年譜長編』「引言」によるとこうだ。大意を示す。

該資料は、劉蕙孫、劉厚沢および「作協同志」が共同編集する。ある材料には劉厚沢が注釈を書き、劉蕙孫の「鉄雲先生年譜長編」も収録することになっていた。ところが出版されてみると劉厚沢の注釈は入っているが「年譜長編」はない。揚州師範学院蔣逸雪教授が以前に発表したことのある「劉鉄雲年譜」に入れ替わった。編集人は「作協同志」の署名である。劉蕙孫に事前連絡もなく「鉄雲先生年譜長編」を蔣逸雪に送りそれによって旧稿を修正しろという。字数に制限をもうけられしかも指定された3日間では意を尽くすことができなかつた、と蔣逸雪

は劉蕙孫に語った。

「作協同志」と名前をふせて登場している。魏紹昌のことだと容易に理解できる。『老残遊記資料』は彼の名前を冠した出版物だ。匿名にしても意味はない。

当事者ですらわけのわからない経過状況であったようだ。外国人の私に理解できる道理もない。そういうことがあったというだけ。

上海から遠く福州にいた劉蕙孫からみれば、魏紹昌は共同編集者だった。

また魏紹昌にしても、劉厚沢（彼は福州にいる兄蕙孫と連絡をとっていた）と共同で『老残遊記資料』の編集に従事していると考えていた。

だが劉厚沢からすればわざわざ言わなくとも自分が編集の中心である。劉家に伝わる貴重な資料を提供している。父大紳の文章に詳細な注釈をつけることができるのは自分たちだけだとの自負心もあつただろう。彼にとって魏紹昌は作家協会側の連絡係にすぎない。

『老残遊記資料』は最初の予定では魏紹昌、劉蕙孫、劉厚沢の3名共編で出ることになっていた。途中でそれが作協（作家協会）文学研究室に変更される。その理由はわからない。とにかくそうなつたのだと劉厚沢は知らされていた。だが刊行されたのを見ると聞いていたのとは違う。魏紹昌編と個人名になっている。名前を削除された劉厚沢たちが憤慨したのは当然だ。盗用事件を論文にする魏紹昌が他人の著作を盗む。

魏紹昌とは私は何度か会つたことがある。いつだったか彼は私に言うのだ。『老残遊記資料』に収録されている劉厚沢の注釈は、全部自分（魏紹昌）が書いたものだ。なぜそんなことを私に話すかな。へえ、そんなことがあるのかと思つただけ。それ以上くわしく質問することもない。だが強い印象を受けたことは確かだ。のちに機会があつてそれを思い出した。劉大紳のつまり劉鉄雲の親族のひとりにむけて魏紹昌のことばについて聞いてみた。その人は劉厚沢の名前で発表した注釈だから劉厚沢が書いたの

だ、と吐き捨てるように答えた。おおコワ。劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』が刊行される前のことだ。外国人の私は資料編集に関する内部事情を何も知らない。今ならわかる。中国の地方会場で同じ場に居合わせながら劉鉄雲の親族と魏紹昌が没交渉であったのはそういうことだったのだ。

以上に見た人間関係のドロドロは1960年代に発生し、それ以後も続いていた。「文化大革命」でそのドロドロは決定的に定着したのか。そう思わずにはいられない別の事柄を知らされた。

私と面識のある人(北京在住)が告発文書を配布して私に手渡す。見ればもと同僚の中国人研究者(男性)2名を名指しして非難している。その人も研究者2名も同じ教授の指導のもとに研究をしていた。その指導教授が死去したあとだ。弟子筋にあたるその男性研究者2名は指導教授が書き残した日本思想史の原稿を保管していた。その原稿を自分たちの名前で出版したと告発する。中国で起こった事件を日本で暴露して効果があるかどうかは疑問だ。しかしその人はそうせずにはいられなかったらしい。指導教授の原稿を盗む。ドロドロの極みだと感じたものだ。思い出したくもないことがフト出てくる。

解決できない疑問3点

盗用事件に話をもどす。

資料集を編集中の彼らが抱えていたのは解決不可能の難問だった。「老残遊記二集」の新聞連載時期をめぐる問題だ。すでに説明した。

魏紹昌は奇妙な行動をとる。劉厚沢には事前に知らせることなく独自に論文を発表したのだ。魏紹昌にいわせれば個人で論文を書いてどこか悪いか、だろう。

それが、魏紹昌「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」(1961)^{*75}だ。

理解がむつかしいのは、盗用事件の存在そのものを劉厚沢に知らせていないことだ。彼らは

同じ編集作業に従事していながら盗用事件についての知識は共有しなかった。なんだろうか。劉厚沢の手紙を見ても魏紹昌論文には言及がない。なによりも『老残遊記資料』には盗用事件があったことの説明がない。魏紹昌は劉兄弟を差し置いてひとり抜け駆けた。

前述のように劉鉄雲、大紳父子はふたりとも「老残遊記」の文章が「文明小史」盗用されたとは知らなかった。大紳論文には盗用の事実は書かれていない。注釈をほどこした劉厚沢も劉蕙孫の『鉄雲先生年譜長編』も同様のものだ。私はどこかに書かれているのを見落としのかといふかった。『劉鶚集』を編集した劉徳隆に直接質問して確認する(2013.6.12)。劉大紳は盗用事件については何も書き残していないとの回答を得た。劉徳隆自身も『劉鶚集』では言及していない。意外なことがあるものだ。

表面を見る限り、阿英が行なったほのめかしを魏紹昌が盗用事件として提出し白日の元にさらした。

ところが自分で問題の存在を明らかにしながら、魏紹昌は解答できないといって以下の3点をほうりだす。

1 李伯元は『繡像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。説明できない。

2 劉鉄雲は盗用についてなぜ抗議をしなかったのか。

3 「文明小史」と「老残遊記」は当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

この疑問3点は確かに難問であった。中国人研究者で答えた人は当時もその後もいない。

またしても汪家燬が登場する。

『繡像小説』編者問題の討論過程のことだ。彼が私への反論として持ち出したのが魏紹昌が解決不能だというこの疑問3点であった。

中国人専門家でさえ解決できない問題が盗用事件にはある。解決不能な問題をかかえているのだから盗用事件は編者問題の論拠証拠にはならない、と汪家熔はいう。

自説を守るためなら何でもアリなのだ。知識を総動員してどんなことでもいう。魏紹昌が答えることができないと引用するのだ。ということは汪家熔も同じ立場にいるとわかる。当然ながら日本人の私樽本に解答ができるわけがないと考えている。だからこそ反論の根拠にした。興味深いことだった。

だが汪家熔は勘違いしている。解答できないのは魏紹昌であって樽本ではないのだ。

お答えしましょう。

私は直ちに反論を書いて『光明日報』に投稿した。樽本「關於“李伯元与劉鉄雲的一段文字案”」である。ところが『光明日報』の「文学遺産」編集部は、新聞紙上の学術討論を突然打ちきった。ゆえに掲載されることはなかった^{*76}。

疑問3点に対する私の解答

魏紹昌が提示した解決不能の3点はあくまでも1961年当時の学術水準、あるいは知識水準を前提にして構成されている。

どういうことか。

まず『繡像小説』発行遅延説が出てくる前のことだ。

つぎにそれと関連する。盗用した「文明小史」第59回は李伯元の死後に発表された。新しい事実の出現である。

すると盗用事件は以前にいわれていた劉鉄雲と李伯元の間には存在しない。そのかわり作品の「老残遊記」と「文明小史」の関係になる。これが新しい状況である。

研究の進展にともなって私の考えも修正した。最終的解答は以下のとおり。

1 なぜ李伯元は没書にした文章から盗用したのか。

解答：劉鉄雲の文章を没書にしたのは李伯元

だ。そこから盗用した「文明小史」が掲載されたのは、李伯元の死後である。だから盗用は厳密にいうと李伯元と劉鉄雲のあいだには存在しない。李伯元が没書にして盗用したのは歐陽鉅源である。

2 劉鉄雲はなぜ抗議しなかったのか。

解答：劉鉄雲は自分の没原稿が「文明小史」に盗用のうえ公表されたことは知らなかった。もし知っていたとしたら息子の劉大紳に話していたはずだ。だが劉大紳の証言は残っていない。盗用の事実を知らないのだから抗議をするわけがない。

3 両者の盗用事件を誰も知らなかったのはなぜか。

解答：「老残遊記」はその後も重版をくりかえし広く読まれていた。だが「文明小史」は雑誌連載後、単行本が1度出版されただけだ。絶版となって長い間読むことのできなかった作品である。その存在そのものが忘れ去られていた。本文を比較対照できなければ問題があることにも気づかない。「老残遊記」から盗用した部分があることなど専門家でさえ知らなかった^{*77}。

これらの疑問を解決した研究者は今まで存在しない。私にしても最終解答を提出するには、かなりの時間を必要としたのだ。

論文2本を記録する。

鄧季方「《文明小史》後四十回非李伯元著作考」(『西南師範大学学报』哲学社会科学1990年第2期(総第61期)1990.4.25)がある。作品内部におけることば使いの差異を抽出する。前の20回は李伯元の筆であり後の40回は他人(人名の指摘はない)の執筆であることを主張する。

郭長海「劉鉄雲の佚詩和几件聯語」(『清末小説』第33号2010.12.1)がある。「老残遊記」の『天津日日新聞』連載は光緒三十一年九月初一日(1905.9.29)の「自序」掲載からはじまっていることを明らかにした。 罫

【注】

- 74) 劉徳隆、朱禧編『也無風雨也無晴——滬榕書札』
 (私家版 刊年不記2008.11)は劉鉄雲の後裔である劉厚沢が兄劉蕙孫にあてた書簡集。『老殘遊記資料』に関連する状況をうかがうことができる。
- 75) 魏紹昌「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」『光明日報』1961.3.25/魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12/『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説卷 中国社会科学出版社1983.4 /『晚清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7
- 76) 中国語論文は次に掲載した。『大阪経大論集』第165号1985.5.15。のち『清末小説研究集稿』所収。関連して次の論文がある。張純「談談劉鶚与李伯元的一段文字案——兼与魏紹昌、汪家熔両先生商榷」『出版史料』第5輯1986.6/『明清小説研究』第4輯1986.12
- 77) 樽本「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」『清末小説から』第75号2004.10.1、1-9頁。

『林紵訳文全集』について
 ——全集モドキでボッタクリ

沢本香子

上海書店出版社編『林紵訳文全集』全47冊
 (上海書店出版社2018.3。『林訳全集』と略する)である。

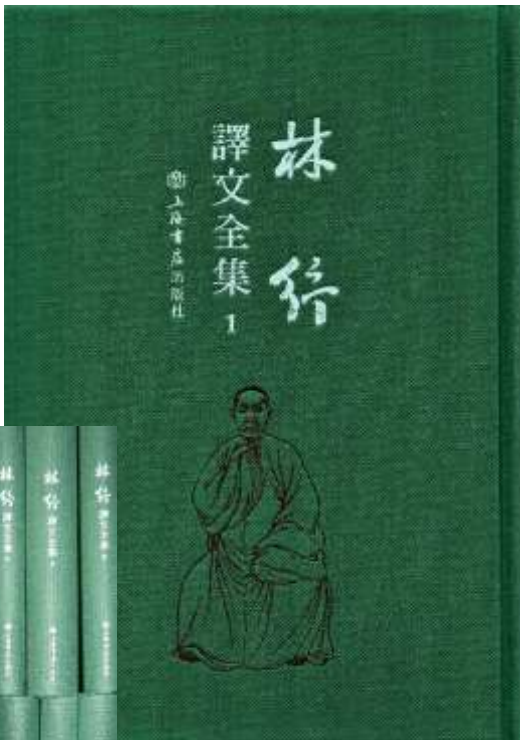
まず一般読者向けに『林訳全集』の概要を紹介する。あとで研究者を対象として詳しく述べる。

一般的紹介

林紵と共訳者の名前を明記した海外小説の翻訳は主として商務印書館から刊行された。読者は多くの作品を大歓迎し全体を指して普通に林訳小説という。

林訳は1作品について多数の版本が存在する。最初から1冊の書物として出たもの、新聞雑誌に連載したあとで単行本になったものもある。多くが商務印書館が刊行する「説部叢書」に収録された。さらにそこから林訳を引き抜いて「林訳小説叢書」全100種になる。刊行の形は複雑で多様だ。重版をくり返した。しかも作品数が多い。新聞雑誌に掲載されたが単行本にならなかった翻訳もある。原稿のまま出版されなかったいくつかの漢訳は林紵死後70年を経過した1994年に上梓された。

本全集は林訳の単行本、雑誌初出を集め、さらに原稿を1本加えて全47冊にまとめた。1899年に『巴黎茶花女遺事』が刊行されて以



来119年の時をへて最初の全集である。慶賀すべき一大事業だ。全冊が一举に刊行されたことを喜びたい。関係者の努力は賞賛に値する。

『林訳全集』は影印本だ。単行本あるいは新聞雑誌をそのまま影印したところに特徴のひとつがある。単行本は版面を約1.3倍に拡大し新聞雑誌は縮小して大きさを揃えた。林訳作品の単行本そのほかを全部で179種を収録している。出版説明にはそう書いてある(後述)。

上記全集は1作品を1種類に限って掲げる。新聞雑誌掲載、単行本、叢書という多様な形態のなかから1種類を選んだ。基本的に初版を採用したと説明する。あくまでも編集の基本方針にすぎない。それが実現できなかった作品もかなりある。

『巴黎茶花女遺事』は初版の1899年版、同年昌言報館、素隱書屋などは無理としても、玉情瑤怨館校刊1901年版でも文明書局1903年版でもない。初版からずいぶんはなれた『茶花女遺事』上海・商務印書館1923年版を掲載している。それしか入手できなかったのだろうか。それならばしかたのないことだ。ただしそう言った事情説明が必要だがそれが無い。

各版本について採用したのはどういうものかも説明してほしい。

復刻ではないので後人の手になる誤植は発生しない。それだけでも少し安心する。単行本では表紙、奥付、広告もそのまま影印しているのがよろしい。広告を削除する雑誌の影印本があったからそう感じる。印刷状態は単行本については鮮明といい。

これほどの規模の大きさに林訳がまとめられた。それがすばらしい。研究資料として利用できそうだ。これが全体を見回した最初の印象である。

上海書店出版社「出版説明」と呉興文「(序言) 外国小説翻訳先駆：林紓」が第1冊の冒頭にある。

呉興文「序言」は林紓の経歴、翻訳出版につ

いての概略、および研究者の評価をいくつか引用して紹介したもの(後述)。批判的な解説でないのは全集用だからなのか。それとも呉興文の執筆姿勢なのかは不明だ。読んだところ従来から存在する林訳批判については言及が一切ない。知っていてわざと触れなかったとすれば、林紓の有罪をいまだに信じているからなのか。そこはわからない。

呉興文が述べていない林訳批判は1918年に始まった。王敬軒(銭玄同)と劉半農が「なれあいの手紙」で激しく繰り広げた。本『林訳全集』が出現した今年(2018)はそれからちょうど100年になる。中華人民共和国では林訳の少数が再版されたのが1980年代になってからだ。それまでは林訳を見ずに林訳を批判していたといわれてもしかたがないだろう。

従来は林紓批判一辺倒だった。この訳文全集の刊行は大きく舵を切ってその方針を修正するという中国学界の意思表示なのだろうか。興味深いところだ。

研究者に向けて遠慮なく

最初にのべた一般読者といっても不確かなものである。『林訳全集』という漢語文獻を利用する読者が日本にどれだけいるかは知らない。ほぼ正の方向に重点を置いてこの全集を紹介すると上ようになる。

以下は研究者を対象にした書評である。『林訳全集』の学術的価値を中心にして述べる。

『林訳全集』は上製本で全47冊、定価29,800人民元(東方書店の売価は804,600日本円。書虫は1,132,400円を割り引いて792,680円)である。この定価設定からして個人向けに販売する種類のものではないだろう。大学図書館、公共図書館、研究機関が購入して收藏するための大型刊行物のように見受ける。

私は前出2書店ではない別の本屋から自費で購入した。その上で収録された全作品を点検している。出版社、書店、学界の誰にも遠慮せず

自由に書く。

全47冊という大規模刊行物をまず手に取ってざっとながめた。みると作品が影印されているだけ。序言はあるが解説する専門冊がない。全集だから説明巻は当然編集されて組み込まれていると思っていた。それが無いのだ。ありえない。悪い予感がする。

○収録作品数

『林訳全集』収録の作品数から見ていく。

上海書店出版社「出版説明」には数の詳細が書かれている。その部分を紹介しよう。

全部で179種を収録する。そのうち単行本は141種、未刊行原稿「秋池剣」が1種、そのほか37種は『小説月報』『小説世界』『小説海』『中華』『普通学報』『東方雑誌』『震旦』『庸言』などの雑誌に発表されたものという。

私が実際に数えてみると全209種である。単行本は木刻を含んで164種、未刊原稿1種、新聞雑誌掲載が44種だ*1。数字が30種も異なる理由を知らない。作品をどう数えるかで把握のしかたが違うのだろう。

作品数が異なるのは問題ではない。別の数字を提示したい。全333件である。

私がいう「件」とは単行本単位ではない数え方だ。作品集であれば収録された作品のひとつひとつを独立させる。たとえば『泰西古劇』だけをあげれば作品1種だ。しかしそれに収録された内容の異なる作品31件を独立項目にして書名とあわせて全32件となる。同じく『吟辺燕語』は20作品によって構成されている。これも書名込みで全21件である。こうして作品をばらした全体の作品数は333件に増加する*2。

林訳作品を細分化して総333件というのは膨大な数字だということができる。

ところが『林訳全集』は全集といいながら未収録の作品がある。『民種学』(北京大学堂官書局1903。未見)、『小説月報』に連載された「紅篋記」12作のうちの7作がない。また李

家驥、李茂肅、薛祥生整理校点『林紓翻訳小説未刊九種』(福州・福建人民出版社1994)も無視している。

全集の編集方針は原物を影印することだ。複製をした『未刊九種』ではその方針と異なるから収録を見送ったのか。理由は書かれていない。ただし全集と称するからにはこういう遺漏があってはならないと考える。理由があるのであればそれを説明する必要がある。全集だからこそその手順は不可欠だ(後述)。

全部の収録をながめていて気のついたことをそのままに書く。

○初出と初版——版本の不統一

林訳の単行本を中心に多くが収録されている。全集というから当然のことだ。さらに雑誌掲載、新聞連載までも影印しているのがよろしい。ここは優れた点だ。

ただし雑誌連載が先行している作品でものちの単行本を採用しているものがある。「哀吹録」は『小説月報』に連載された(1914年)。『林訳全集』に収録したのは「林訳小説叢書」の方だ。初版を収録するという編集方針に合致しない。初版であって初出という意味ではないということだろうか。その説明もない。

とりあえずどのような形であれともかく林訳のほとんどを読むことができるようになった。これには深く重い意味がある。林訳を批判しつつけて長年にわたり翻訳集も出さなかった時代に比べれば大きな変化であり進歩だ。そこは高く評価できる。

初版を収集するという編集方針をもう少し検討する。

収録された版本に統一性がない。

商務印書館の「説部叢書」を例にあげよう。「説部叢書」には清朝末期の元版(タンポポ文様)十集と中華民国後の初集本(リボン文様)100種がある。収録されたのは元版ではなくのちの初集本がほとんどだ。基本だけを説明する。

問題となるのは元版とそれを再版した初集のみである。のちの2集、第3集、第4集には問題はない。

そこから『林訳全集』の編集方針は版本にこだわらずとにかく集めることだと私は理解した。林訳の全作品を収録することをまず優先したのだろう。それがこの全集だ。

前出商務印書館の「説部叢書」はタンポポ文様の元版は含まれない(ただしタンポポ文様の試行本が5点収録されているのは珍しい)。あとは主として民国後に刊行されたリボン文様の初集本と林訳小説叢書である。全集と称するものが商務「説部叢書」で先行する元版タンポポ文様を集めない(前出試行本はある)。ゆえに最初の刊行からリボン文様であったという従来からの誤解が維持継続される原因となる。誤った認識を正すためにもタンポポ文様の版本を採取すべきだった。そうしなかった説明もあってしかるべきだろう。

くり返す。「出版説明」では基本的に初版を採用すると述べている。しかし全作品についてそれが実現しているわけではない。「説部叢書」についていえば初版ではないものが多い。

上海書店出版社「出版説明」と呉興文「序言」はともに繁体字を使用している。中国大陸の刊行物で繁体字縦組みというのもあまり見かけない。縦組みの影印本だからそれに合わせたのか。理由は不明。それにしても上海書店が影印した「晚清小説期刊」シリーズ(香港・商務印書館1980)の簡単な説明は横組み簡体字を使用していた。

○呉興文「序言」

呉興文(1957-。台北市人)は蔵書家として有名だ。その「序言 外国小説翻訳先駆:林紓」を紹介する。

一、與巖復成為兩大名家、二、前期翻訳影響深遠、三、後期翻訳瑕不掩瑜、四、名家綜評の4部に分かれる。

漢訳『巴黎茶花女遺事』の成立事情を紹介し巖復との関係を述べる。前期翻訳というのは1899-1911年を指すようだ。つまり清末までである。

林紓が使用した漢訳名には「今訳」と注記して現代漢語訳名を添える。原語を示すのは1例「Tale from Shakespeare Tales from Shakespeare」(6頁)のみだ。しかもそれは誤植している。「Tales ——」でなくてはならない。また『黒奴籲天録』を誤って『——論』(3、5、6頁)と書く。基本的な個所を複数ページにわたって間違ふ理由がわからない。著者の誤記であるにしても上海書店出版社の担当編集者がいるだろう。文章の校正はしないのか。不注意だ。

周作人日記を引用し周樹人が林訳を好んだことを書く。しかしふたりがのちに林紓批判を実行したことには触れない。

『英国詩人吟辺燕語』序を引いて「……而不廢莎士^之詩」(4頁)と誤る。「莎氏」が正しい。これも著者と編集者の見落とししか。

『吟辺燕語』を説明して「英国のラム姉弟がシェイクスピア劇にもとづいて[英国蘭姆姉弟據莎士比亞劇]」(4頁)と書いている。この説明は英語原作を説明するならば事実だ。しかし林訳についていえば正確ではない。『吟辺燕語』の表示は「英国莎士比著」である。ラム姉弟の名前はない。そこをつかんだ王敬軒(錢玄同)と劉半農が林紓を批判したのは有名な話だ。それを「英国蘭姆姉弟據莎士比亞劇」と書けば林訳の実物から離れてしまう。従来の説明を鵜呑みにして該当本を見ていないのだろうか。原物で確認しているのであればラム名のないことを説明しなければならない。

『吟辺燕語』を出したのだから劉半農の林訳批判「戯曲を小説にかえて翻訳した」に触れるべきだった。のちの「戯曲と小説の区別がつかない論」である。それが無い。「区別がつかない論」は現在の中国学界では禁句であって禁區に指定されているのではないかという推測があ

る。それがこの『林訳全集』序言にも及んでいるのだろうか。疑問として残す。

朱希祖日記を引用。郭沫若『我的童年』の林訳賛美を紹介するのは林訳を擁護するばあいによく見かける。林訳を批判する時には無視されるものだ。胡適の称賛と呉宓日記の言及を引く。

呉興文の紹介を見れば清末時期の林訳評価はかなり高い。

後期翻訳とは中華民国1912年から林紓死(1924年)後の1925年までを指す。林訳批判は取り上げないから否定的見解は姿を見せない。徐樹錚の名前を出し、惲鉄樵、錢鍾書から引用して林訳評価はここでも正の方向だ。

「十萬元」について転載雑誌のひとつとして「一九一五年六月一日《中華小説界》第二年第六期」と説明している(8頁)。間違い。周瘦鵑「十萬圓」と混同している。実物で確認していないとわかる。

後期翻訳部分では主として翻訳の共訳者、刊行時期、現代漢訳名、出版社などを列挙するのみ。くり返すが1918年に始まった林訳批判運動についてはまったく記述しない。

名家総評は、張静廬、胡適、錢基博、周作人、鄭振鐸、錢鍾書を紹介しておおむね正の方向だ。錢鍾書を引用して林訳が原文に忠実でない個所は「彼の助手」の理解不足のせいにしたところからもそれがわかるだろう。

特に指摘しなければならない。呉興文は胡適と鄭振鐸の文章を紹介しながら、彼らが林紓を評して「戯曲と小説の区別がつかない」と批判した事実を取り上げない。

呉興文は蔵書家として著名である。林訳についてもひととおりのことは理解しているようだ。しかし林訳についての専門論文を発表したとは聞いていない*3。上に見たようにいくつかの誤りがある。一般読者に向けた林訳の概説という範囲を出ていない。これを全集の解説にかえることは無理だ。呉興文「序言」はあくまでも「序言」どまりである。

こういう大型刊行物では研究者が編集に参画しているのが普通だろう。編集案を作るのは林紓研究の専門家だと推測する。あるいはその研究者が編集を担当した可能性もある。だが「出版説明」には「相關学者」とあるだけで具体的な人名をあげない。「序言」を書いている呉興文はどうだろう。林訳作品だといって他人の作品を挙げるくらいだ。深い知識があるとは思えない。編集を担当しているかどうかはあやしい。私が考えるに「序言」の執筆依頼を受けただけだろう。そうすると上海書店出版社の編集者が主宰したことになる。研究者を兼ねる編集者はいるから不思議ではない。

以下に『林訳全集』に見えるいくつかの不備を指摘する。編集上の不徹底さが目立つ。研究者が参加していてこの結果なのかといぶかる。

○いくつかの不備

「空谷佳人」([林訳全集11])を収録する。『東方雑誌』を影印したもの。原作者不記、訳者不記、刊年不記。全集に収録したのは林紓訳だと考えたからに違いない。阿英目録([阿英127])に「(英)博蘭克巴勒著、林紓訳」としてあるのが収録した根拠だと思う。阿英の誤り。雑誌にもものちの単行本にも林紓の名前はない。ずっと以前から馬泰来の指摘がある(1981)。つまり林紓の翻訳ではないのだ。『林訳全集』の編集者は阿英目録の記述を信じ込んだ。あるいは誤記をくり返す王勇の論文が根拠だろうか*4。現在では林訳ではないと明らかにされている(古二徳2015)。その研究成果に気づいていない。認識不足だ。

「羅利因果録」([林訳全集28])の奥付が奇妙だ。「魚海涙波」のものを誤って掲げている。奥付に「魚海涙波」と明示してあるのだから一致しないことは一目瞭然なのだ。点検不足である。全集の全冊をさがしたが「羅利因果録」の奥付は結局のところ行方不明のままに終わっている。不手際だ。

CHRONICLES OF MARTIN HEWITT

BY
ARTHUR MORRISON
AUTHOR OF TALES OF MEAN STREETS, ETC.



NEW YORK
D. APPLETON AND COMPANY

1896
24

THE CASE OF THE LOST FOREIGNER. 237

"Well," the inspector said, "not much to be got out of him, is there? The doctor will be sending for him presently."



"I fancy," said Hewitt, "that this may turn out a very important case. Possibly—quite possibly—I may not have guessed correctly, and so I won't tell you anything of it till I know a little more. But what I want now is a messenger. Can I send some-



下似風學。又似氣球。垂繩其下。又次。則大類巡捕。及馬頭。車途迴院。幸君指以示我。

三十七



下似風學。又似氣球。垂繩其下。又次。則大類巡捕。及馬頭。車途迴院。幸君指以示我。

三十七

二百七

「埃司蘭情俠伝」([林訳全集03]) 木刻、候官
 嚴復署、出版社不記、光緒甲辰(1904)孟秋
 (旧暦七月)の368-369頁である。「缺頁」と
 表示して空白にする。しかし原本の巻上47丁
 は続いて影印されている。「缺頁」の意味が不
 明。

「神樞鬼蔵録」([林訳全集12]) 説部叢書
 1=62収録の図(247頁)に問題がある。挿絵
 がない。

原作は、ARTHUR MORRISON, CHRONICLES
 OF MARTIN HEWITT. 1896 (Open Libraryによる)
 の“THE CASE OF THE LOST FOREIGNER”だ
 (中村忠行)。原作、林訳(架蔵)と『林訳全
 集』の該当ページを並べる。林訳には原作の挿
 絵がそのまま使用されている。ところが『林訳
 全集』ではそれをきれいに消去する。影印本で
 あるにもかかわらず実在している挿絵を削除す
 るのはどうしてか。なんらかの意図がなければ
 できない種類の操作だ。不可解きわまりない。

第17冊の目録(目次)には誤植がある。ふ
 たつの「塊肉余生述前編」は「——後編」の間
 違い。しかも前編は説部叢書2集第2編を採用
 するが後編は林訳小説叢書第22編と不一致だ。
 前後編を同じ叢書で用意できなかったのか。

奥付の刊行部分が欠損しているものがある。
 「西奴林娜小伝」([林訳全集23])の刊年部分
 が欠損している。「藕孔避兵録」([林訳全集24])
 奥付に欠損部分がある。「貝克偵探談初編」
 ([林訳全集24])奥付の刊年部分が欠損する。
 あとはいちいちあげない。

影印するばあいの底本については破損のない
 良質な版本を選択するのが常識だろう。良版を
 探すという努力の跡が見えない。

作品によっては図書館の蔵書印を消した痕跡
 が残っているものがある。なぜそうする必要が
 あるのか。理解不能。

以上のいくつかは刊行した上海書店出版社、
 その編集者、広げていえば中国学界の翻訳小説
 に対する蓄積の少なさ、見識のなさ、無責任さ

を露呈させている小さな箇所だ。

問題は新聞雑誌からそのまま影印した作品に
 関係して発生している。

『小説月報』『東方雑誌』などの雑誌からそ
 のまま影印した作品だ。そこまではいい。とこ
 ろが該当部分に書誌が記されていない。連載で
 あれば期数と刊年を注釈のかたちで明記すべき
 だ。解説巻を編集していないから書誌の不記は
 致命的な欠陥となる。編集上の手抜きとしかい
 いようがない。

例をあげる。「小方篋」([林訳全集26])は
 『時報』を影印した。あるいは「膜外風光」
 ([林訳全集43])は雑誌『紫羅蘭』を影印した
 もの。雑誌名不記、号数不記、刊年不記で放置
 している。それぞれに注記する必要があると編
 集者は考えなかったらしい。不親切だ。

「欧史遺聞」([林訳全集29])は『広肇周報』
 雑誌を影印した。ところが連載途中の18、20
 が未収録となっている。さらに7、9頁はノン
 プルも打たない空白ページだ。これは理解をこ
 える珍妙な措置だ。該作品については『上海
 亜細亜報』(1915.9.10-10.3。未見)との関係も
 知りたいところだが説明がない。

「紅篋記」([林訳全集31])も雑誌『小説月
 報』を影印した。ただし刊年不記。また「無線
 電話」など7件が未収録である。

上下冊で採用した叢書名が異なるものはほか
 にもある。「鉄匣頭顱」([林訳全集41])は上冊
 には説部叢書を、下冊には林訳小説を採用する。
 巻下の林訳小説には奥付がない。だから刊年が
 不明となる。

日本で全集を刊行するとすれば研究者、編集
 者を動員し版本も探索しつくす。比較検討のう
 え最良のものを採用する。そうして出版される
 ものだとは私は考えていた。日本では出版社の良
 心を信頼するのが当たり前だ。ところが『林訳
 全集』を手元においてみて中国と日本では全集
 についての考え方が異なっていることが判明し
 た。『林訳全集』は研究資料として依拠するに

は不確かな部分を残している。最初の印象は大きく崩れた。

上海書店といえば「中国近代文学大系1840-1919」全30冊(1991-1996年)を出版している。その上海書店出版社が刊行するからと最初に期待した分だけ裏切られた思いが強い。残念としかいいようがない。

全集モドキ

林紆の創作は含まず翻訳だけで全47冊という規模の大きさだ。林紆と多数の共訳者および版元のひとつ商務印書館が長年にわたって協力し努力し続けた成果が目前にまとめている。

林紆と商務印書館の出版関係は1903年の『伊索寓言』から彼の死去する1924年の『情天補恨録』まで続いた。そればかりか林紆の遺作は『小説世界』(上海・商務印書館)に連載されている事実もある。商務印書館は自社の看板として林紆を大切に丁寧に待遇した。該社の経済的發展に林紆は多大な貢献をしたといえることができる。

それら多数の林訳を上海書店出版社が2018年によく集結させたのだ。あちこち探しまわらなくとも林訳作品のほとんどを見ることができる。その便利さはだけは評価する。

しかしこの『林訳全集』には上で指摘したとおりいくつかの不備と誤りがある。高額な値段と全集内容が不均衡を示している。金額に見合った内容か。そういう疑問が発生するのは自然の流れだ。

日本では全集といえば特に手間隙をかけて工夫をほどこす。収録したそれぞれの作品について詳細な解説がつくのが普通だ。林訳だからこそ原作者、原作品の明示、版本の変遷についての説明は不可欠だ。解説のために1冊が充ててあると思うのが当然ではないか。ところがこの『林訳全集』にはそれがない。落胆の大きさが私に同じことをくり返させる。研究には不可欠の原作者、原作品を明記しない翻訳全集が編集

刊行された。普通に考えてそのようなものが存在していいのだろうか。大きな疑問を感じる。

重ねて言う。上海書店出版社「出版説明」、呉興文「(序言)外国小説翻訳先駆：林紆」があるだけ。これでは解題説明にはならない。

問題の根は広く深い。

林訳批判が始められた1918年から全集刊行の2018年まで100年間が経過した。その間、中国では林訳について研究の蓄積がほとんどなされていなかったという意味でもある。

1970年代まで林訳を主題とした研究論文は多くない。中国近代現代文学史において林紆と林訳は主として批判の方向に重点を置いて紹介されるのが主流だった。否定するという結論がすでに定まっている。ならば論文を書いたとしても負の方向を強調して立論するほかない。すでに負の方向で評価の定まった林訳について情熱をもって研究しろという方が無理だ。だから研究の基礎である翻訳の定本探索はそれまで無視に近い状況だったと指摘せざるをえない。

変化が起こるのは「文化大革命」終結後だ。まとまって信頼のおけるものは1980年代からの馬泰来(在米)、張俊才、近くは張旭・車樹昇、楊麗華の著作くらいのものか。ほかには古二徳(CE/SAR GUARDE-PAZ。スペイン)、張治、付建舟らの名前が出てくる。いくつかの資料集、年譜などに林訳は収録される。だが名前をあげた人々以外の研究者は先行文献を複写しているだけのような印象を抱く。しかも判明している原作者、原作品についての箇所はどういうわけか引き書きしない論文もある。奇妙なことだ。英語、フランス語表記は必要ないという判断だろうか。私の勘違いであればそれでもいい。

上記の研究者の誰かに『林訳全集』解説巻の執筆を依頼すべきであった。強くそう思う。

どうしても無理であるというのなら目録がネット上で公開されている。研究者が普通にやっているように目録から関係部分を複写し

て編集しなせばなんとか形にはなったと思うのだ。それに気づかなかった、あるいはその気がなかったということだろう。または樽目録の存在そのものを知らなかった可能性もある。

最新の『林訳全集』に林訳の書誌が作成されていない事実はなにを物語るのか。

日本において全集本は民間の出版社が独自に編集刊行している。だが日本と中国では出版状況が異なる。中国では刊行物はしかるべき組織の許可を必要とする。『林訳全集』のばあいは中国学界の上級が認めたから出版が実現したと推測される。さらにはこれほどの大型刊行物だから研究者が参加しているに違いない。ゆえにこの『林訳全集』は中国学界全体の見識に直接つながっていると考える。林訳について現在の中国学界がどのように認識評価しているかが露出しているという意味だ。それは中国学界の翻訳研究がどのあたりの水準にあるかを示しているといっても同じことである。

いままで林紓と林訳を批判し続けてきた中国学界に『林訳全集』が出現したのは大きな変化であると私は考える。そこに注目する必要がある。だが学界の流れ、傾向の変化に気をとられそれで思考が停止しては意味がない。重要なのは全集の内容なのだ。厳密に作品を選定し編集し詳細な解説をつけて学術上の審判に耐えうるだけの全集にすべきだった。表面に現れていないだけかもしれない研究(あったとして)の成果を注いでほしかった。該全集に研究解説冊がないことは私に絶望感を抱かせる。なんとかならなかったものか。

はっきり言う。内容からして研究水準は高くないと理解した。いくつかの編集上の不備がある。参照すべき資料、目録の存在を知らないのが理由だろう。編集上の不手際については怒りを乗り越してあきれているというのが本当のところだ。

なによりも致命的な欠陥は各種作品についての書誌がないことだとくり返す。特別強調した

いほどに重要で意義のある作業なのだ。それが『林訳全集』ではなぜ実現していないのか。林紓と林訳の政治的評価とは切り離して純粋に文献研究として成立する。独自に行なうことができる学術的基礎作業だ。詳細な解説文がないから林訳についての全体が理解できない。全集と称しているが内容は不十分だ。

上装本で見た目は装丁の立派な書籍である。だが内容中身は濃厚とはいえず薄味だ。結論は「全集モドキ」とせざるをえない。

ポッタクリ

要は内容と販売価格との兼ね合いになる。定価が示されている数十分の一であれば、まあしかたがないかと思う。しかし全集の内容と出版社が設定した価格がつりあわない。あの高額でこの内容では返金を要求したいくらいだ。「全集モドキ」にしてあれほどの値段を支払わせたから「暴利をむさぼる」である。それではすまない。俗な表現を使えば「ポッタクリ」にあった気分だ。それくらいの俗語を使用しなければ私の感じる強い不満を直接に表現することができない。 罍

【注】

1) 明細は以下のとおり。

単行本：未刊原稿1、説部叢書121(初集13、2集47、第3集37、第4集19、一集試行本5)、林訳小説叢書25、木刻1、商務印書館9(うち小本小説2、万有文庫1)、文明書局3、中華書局2、北京大学堂官書局1、中外日報館1、宣元閣1。

新聞雑誌：『小説月報』25、『小説世界』3(「善良的騙子」は1とする)、『小説海』1、『中華』1、『普通学報』2、『東方雑誌』3、『震旦』2、『庸言』2、『小説時報』1、『婦女雑誌』1、『時報』1、『広肇周報』1、『紫羅蘭』1。小計209種

2) パラ作品数の明細は次のとおり。『泰西古劇』31、『吟辺燕語』20、『貝克偵探談』12、「善良的騙子」13、『拊掌録』10、「荒唐言」8、『羅

刹因果録』8、『神樞鬼蔵録』6、「紅篋記」5
(ほかに未収録7)、『哀吹録』4、『焦頭爛額』
3、『社会声影録』2、『恨縷情絲』2。小計124件。
これに全209種を加えると333件となる。

3) 吳興文「一部《茶花女》, 串起林紆嚴復張元濟
的友誼」『深港書評』2017. 12. 19。いくつかのウ
ェブサイトで読むことができる。標題のとおり
林紆、嚴復、張元濟の関係を紹介したもの。商
務印書館が創設120周年記念で刊行した『天演論・
茶花女遺事』壹佰貳拾年紀念特蔵(北京・商
務印書館2017)と関係しているだろう。

4) 王勇『《東方雜誌》与現代中国文学』北京・中
国社会科学出版社2014. 4 “學術新視野”叢書。
135頁
王勇「林紆与杜亜泉」吳仁華主編『革新与守固—
—林紆國際學術研討會論文集』北京・商
務印書館2017. 5。335頁
王勇「林紆与杜亜泉」郭丹、朱曉慧主編『林紆
研究論集』北京・九州出版社2018. 6。14頁

★

- 常 方舟○【書評】(樽本照雄《林紆冤案事件簿》)
遲到却不應缺席的正名 「上海書評」ウ
ェブサイト『澎湃新聞』2018. 12. 27 電
字版
- 王 震○【書評】(樽本照雄《林紆冤案事件簿》)
“申冤”与“重構” 『論文衡史』2018. 12. 16
- 狄 震晨○【書評】『林紆冤案事件簿』近
期出版 撥開層層謠言還原歷史真相 『文
匯報』2019. 1. 14原載 ウェブサイト「中
国新聞網」など
- 李 艷麗○樽本照雄与他的清末小説研究
会 『文匯學人』(第377期)2019. 1. 25
- 張 治○新旧世界的夾縫——林紆在1919
 『文匯學人』(第377期)2019. 1. 25
- ○《林紆冤案事件簿》 『南方都
市報』2019. 1. 17 電字版

次号の公開は2019年7月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

吳構についての文娟論文

荒井由美

本稿で紹介検討するのは、文娟「試論吳構在
中国近代小説翻譯史中的地位」(2018)^{*1}である。

吳構の翻訳が日本語にもとづいて漢訳して
いることは知られているだろう。上記文娟論文は
吳構の単行本作品を主として取りあげる。商
務印書館が刊行した書物に絞り込んで立論した。

先行論文

私が把握している吳構についての研究論文は
主として日本で公表されていたものだ^{*2}。

中国で発表された文娟以前の関連論文は4本
が私の手元にある^{*3}。2013年と2014年だから日
本よりも比較的新しい(注を参照)。ほかにも
発表されているが私は入手していない。

その一覧を見れば日本の古い文章は30年前に
さかのぼる。1世代が経過しているのを知れば
少し驚くだろう。過去の論文が中国人研究者の
注意を引かなかった原因がある。そのひとつは
吳構の翻訳が日本語にもとづいているからだ
と思われる。日本語を理解する外国人研究者は
それほど多くはないからだ。

そういうなかで発表されたこの文娟論文に注
目する。文娟も吳構研究を一步進めたとい
うことができよう。なによりも先行論文を(た
ぶん)踏まえて書かれているのがよい。よろこばしい

ことだ。

論文内容を冒頭から順に見ていく。紹介しながら検討し気のついたことを述べる。

商務印書館「説部叢書」

呉禱の漢訳が商務印書館の「説部叢書」にいくつか収録されている。その関係で文娟は「説部叢書」元版(文娟は付建舟の用語を使用して「十集系列」と書く)100種の完成を1908年と主張する。

文娟がそこに注釈①をつけたのは付建舟(2015)の1907年説があるからだ(ここは典拠論文を明記する)。すなわち付建舟は「説部叢書」の刊行開始が1903年であり元版100編の完成は1907年だとした。これに対して文娟は異議を唱えたことになる。

先に文娟は先行論文をふまえていると書いた。しかし最初からそうではなさそうな部分が出てくるから困惑する。

はるか昔に「説部叢書」元版の完成は1908年であると指摘した先例がある。2002年の神田一三「商務印書館版「説部叢書」の成立」⁴にさかのぼる。文娟はその先行論文を示さない。あることを知らないのだろう。ならば踏まえようもない。16年後に偶然の一致で同じ結論にたどりついたらしい。

書家としての呉禱

「一、書法家兼訳者：呉禱其人」は呉禱が書家であり上海書画公会に所属していたこと、蔡元培と交際があり愛国学社で教員をしていたこと、商務印書館に勤務していたことなどを紹介する。

文娟はなんでないことのように当然わかっているという執筆態度で記述している。疑うことなく書家の呉禱だと軽々と迷わずに書く。中国の研究者であればこれを読んで普通に驚くだろう。翻訳者で有名な呉禱が書家でもあったことはほとんど初耳のはずだ。

陳大康『中国近代小説編年史』(2014。『編年史』と称する。略号は[編年])⁵がある。「序」で呉禱に言及する。1908年に刊行された『棠花怨』の表示は「中国天涯芳草館主海陽呉禱宣中訳」だと指摘した(4頁)。これにより天涯芳草館主と呉禱宣中が結びつく。ただし陳大康は天涯芳草館主が書家であることをいわない。すると書家としての呉禱を紹介したのは文娟の新発見だと一般読者は思うのではないか。文娟は「日本学者沢本香子在《作為書法家的呉禱》」(212頁)を掲げる。呉禱が上海で日本語を学んだことの典拠として引いている。従来であれば呉禱は日本に留学したことになっていた。趙霞(2013。注参照)もそう書いているから文娟はそれに反論するつもりか。論文名を示してないから確かめようがない。

沢本論文(2009)はそこに力点を置いているわけではない。重要なのは呉禱が書家であった事実を各種資料、新聞なども示しながら本格的に指摘し展開したことだ。その主要箇所を無視するのはいかがなものかと思う。文娟が沢本論文名を出したいのであれば別の個所もあったはずだ。しかも沢本論文の題名はあげたが掲載雑誌と刊年を記述しない。完結した1本の論文において参考文献の詳細を明らかにしないのはよろしくない。文献追跡をするかもしれない読者にはもう少し丁寧知らせるべきだ。

商務印書館刊行の白話翻訳小説

「二、白話文翻訳小説先行者」では商務印書館が刊行した白話小説の書名のみを紹介する。根拠としたのが王雲五『商務印書館と教育年譜』だ。文娟はこちらも出版社と刊年を提示しない。

資料として王雲五の該書を使うのは基本においてお勧めしない。信頼性に欠ける。私が見ている台湾版は巨冊ではあるが商務印書館と日本金港堂の合弁については一言も証言していないのだ。頼りにならない。商務印書館が刊行した呉禱の小説を探索したいならば別の資料を使用

したほうがよい。

あるいは『商務印書館図書目録(1897-1949)』(1981)^{*6}を思いつくかもしれない。あらかじめ書いておく。資料として利用するのは不可である。書名などは記録されているが刊行の年月がない。刊年不記では資料として大きな欠陥を抱えているといわざるをえない。「説部叢書」は元版を収録しない。初集本(および第2集、第3集、第4集)のみである。一般の研究者が元版の存在を知らないのはこの商務印書館の記述が原因のひとつだと推測する。あげた原作がいくつか間違っている。だいいちこの図書目録は記録のため、あるいは研究用に商務印書館があらたに編集したものではない。中華民国時代に販売促進を目的にしたいわば広告として作成配布した書目にもとづいている。誤りがあっても不思議ではない。そうと知るべきだ。この図書目録の記述に依拠して資料的なことを探索すべきではない。

呉構の加筆

『賣国奴』に呉構独自の加筆があることを指摘する(216頁)。文娟が引用するのは呉構が割注で記入した部分だ。それを示して日清戦争時に中国の兵士が潰走する様子を呉構が加筆し怒っていると説明する。論文で登張竹風の日記を直接は引用していない。だが日訳と漢訳を比較対照しなければ見つけることができない。文娟の新発見だ。そう記述するのはとてもよい。

確認するために登張竹風の日記^{*7}を示す(ルビ省略。以下同じ)。戦争から帰還した若者について描写した箇所だ。該当する呉構漢訳を対比させる。

【竹風】戦の名残は弾痕刀傷にあはれを留めて、腕にはまだ繃帯を施して居るものも二三人、一座の人は何れも灰出村の農夫であるが、……(後略)7頁

【呉構】身上還留着争戦的記念旧跡。不是

彈子穿過的洞。就是刀鋒斫過的傷。或則頭上。或則身上。或則手脚。傷處不一。都用布帶子。繃裹着。

身体には戦争を記念する名残を留めており銃弾が貫通した孔でなければ刀の切り傷である。頭上、身体上、手足など傷ついた箇所は同じではなくどこも布切れで縛っている。

呉構漢訳は竹風日訳のほぼ直訳だ。あるいは語句を追加して少し詳しい。上につづいて呉構は竹風日訳にはない次の語句を挿入している。文娟はこの部分を引用していない。

【呉構】但若要找我們中国打仗的兵。都在後面背脊受傷的。却一個也沒有。われらが中国の戦う兵士はと見れば全員が後ろの背中に傷を負っており(そうでない)者はひとりもない。

もし呉構の加筆をいうのであれば本文にある上の箇所を引いて示すのが普通のやり方である。「(そうでない)者はひとりもない」とカッコを補って日本語をつけたが「却一個也沒有」ではその訳にはならない。最後に「不那樣[そうでない]」などが欠落しているのではないか。

文娟は上の本文部分は無視した。引用したのはその後ろに施された割注だ。すなわち上の加筆だけでは説明不足だと呉構は考えたのだろう。さらに補足して詳細に説明したのが文娟の示した割注だ。

原文のまま句読点なしで示せば「甲午之役中国与日本戦敗兵勇之傷皆在後腦後脊後腿後腿等處始知中国兵勇未戰即逃之故[甲午之役(日清

或則手脚傷處不一都用布帶子繃裹着但若要找我們中国打仗的兵都在後面背脊受傷的却一個也沒有

戦争)で中国は日本との戦いに破れた。兵士の傷はすべて後頭部、背中、肩の後ろ、後ろ足などの箇所であり中国兵士は戦わずに逃亡したのであるとわかる]」である。

呉禱の加筆をいうのであれば文娟が引用した箇所(すなわち割注のみ)は適切とはいいいく。考え直す必要がある。

ドイツ語原書、その竹風日記に日清戦争が出てくるはずがない。ここは漢訳者呉禱本人が訳文の中に出現した箇所だ。文娟の指摘する通りである。

日本発の小説目録

215、220頁に樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』を出す。中国で刊行された樽目録第3版(2002)であるが出版社名齊魯書社と刊年を明記していない。それよりも最新の第10版が2018年にネット上で公開されているのだからそちらをあげるべきだろう。それとも文娟の所属する組織環境からは日本のウェブサイトには接触できないのか。そうだとすればお気の毒である。

商務印書館刊行の呉禱漢訳

「三、日文転訳小説集大成者」はその題名通りだ。日本語にもとづいて漢語に転訳した集大成者だと呉禱を紹介する。

呉禱漢訳の単行本で商務印書館が出版した11種を「商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表」(217頁)にまとめた。書名、原作者、初版年、叢書番号、原本を示して詳しい。

文娟はこの統計表を作成した際に使用した参考文献を明示しない。それがいいからといって独自に調査したわけではなさそうだ。先行する小説目録を使用した箇所に問題が発生しているからわかる。

一見して「説部叢書」の番号に誤りがあるのが目立つ。別にまとめておいた。

文娟が一覧表の作成時に主として利用した小

商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表

書名	版権頁署名	首刊時間	丛书编号	来源
卖国奴	(日)登张竹风原译	1905 ⁹	说部丛书 1集 16编	1904年金港堂出版(德)苏德蒙著,登张竹风译《卖国奴》
车中毒针	(英)勃拉锡克原著	1905	说部丛书 1集 30编	1891年三友社出版(英)勃来雪克著,石井フランク述,今村次郎笔记《車中の毒針》
寒牡丹	(日)尾崎红叶原著	1906	说部丛书 1集 41编	1901年春阳堂出版(法)原著者不明,長田忠一、尾崎徳太郎译《寒牡丹》。
寒桃记	(日)黑岩泪香原著	1906	说部丛书 1集 31编	1889年魁真楼书店出版黑岩泪香译《有罪无罪》,EMILE GABORIAU “LA CORDE AU COU”,英译“WITHIN AN INCH OF HIS LIFE”
侠黑奴	(日)尾崎徳太郎原著	1906	说部丛书 1集 52编	1892年博文馆出版(英)Maria Edgeworth著,尾崎红叶译《侠男儿》
美人烟草	(日)尾崎徳太郎原著 ⁹	1906	说部丛书 1集 53编	1905年《太阳》第11卷12-13号刊载广津柳浪《美人莩》
薄命花	(日)柳川春叶原著	1907	袖珍小说	
黑衣教士	(俄)溪岸霍夫原著(日)薄田斩云译述	1907	袖珍小说	1904年《太阳》第10卷第13-14号刊载薄田斩云译《黑衣僧》
银纽扣	(俄)兼门忒甫原著	1907	袖珍小说	《太阳》第10卷第5号刊载(俄)兼门忒甫原著,嵯峨の家主入译《当代の露西亚人》
五里雾	(日)上村左川原译	1907	袖珍小说	1902年《太阳》第8卷第4-5号刊载上村左川译《五里雾中》,MAUPASSANT(莫泊桑) “MONS I EUR PARENT”
侠女郎	(日)押川春浪原著	1915	说部丛书 2集 47编	1907年博文馆出版押川春浪《女侠莩》

・ 217 ・

説目録のひとつは、前出陳大康『編年史』で間違いなだろう。陳大康が「説部叢書」元版と初集本の区別ができないのをそのまま受け継いでいるからだ。説明する。

商務印書館「説部叢書」については押さえておくべき基本知識がある。清末の元版(表紙タンポボ文様)と民初の初集本(同リボン文様)という2種類があることだ。元版を基礎に再構成、再編成して初集本が生まれるという時間の流れだ。文娟一覧表のどこが誤りかといえはその基本的推移が把握できていない。清末1900年代の初版といいながら民初に出た初集本の番号を振り当てている。正しく2集47編と示すのは1例のみ。あとはすべて間違う。

例をあげる。1905年の『賣国奴』を指して「説部叢書1集16編」(217頁)とする。これはのちの初集本の番号だ。先行する元版は「説部叢書第二集第六編」だからそう表示する必要がある。

先に文娟が樽目録第3版の書名を出している

ことを指摘しておいた。ならば該目録では商務印書館「説部叢書」の2種類について数字を使って区別していることを理解しているのではないか。元版第一集は漢数字の「一」を使う。初集本はアラビア数字の「1」で表す。「元版の第2集第7編は二=7と表示して区別している」と「本書の読み方」において説明してある。

ところが間違っただけの一覧表を提出しているのはなぜか。樽目録第3版を使用した文娟は元版と初集本に区別されていることに気づけなかったのかもしれない。

文娟の手に陳大康『編年史』を書評した文章^{*8}があることを私は知っている。そこには陳大康が商務印書館「説部叢書」について元版と初集本の区別ができていないと書いてある。文娟はその書評を読んだかもしれないが理解しなかった。その結果が誤記だ。

細かいことだ。しかしその些細な箇所こそ研究者の認識程度が表出する。そう私は考えている。

「商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表」正誤表
(×=誤、○=正)

- 賣国奴 説部叢書 × 1集16編[編年②662]
→○第二集第六編/後版の表示は信用できない
- 車中毒針 説部叢書 × 1集30編[編年③930]
→○第三集第十編/ (英) 勃来雪克と石井ブラックは同一人物。原作は日本語
- 寒牡丹 説部叢書 × 1集41編[編年③976]
→○第四集第十編
- 寒桃記 説部叢書 × 1集31編[編年③959]
→○第四集第一編
- 侠黒奴 説部叢書 × 1集52編[編年③1048]英文原作不記
→○第六集第二編/1892年ではなく1893年
- 美人煙草 説部叢書 × 1集53編[編年③1048]
→○第六集第三編
- 薄命花 [編年③1291]原作不記。樽目録第3版原作不記
→樽目録 柳川春葉「虚無党の女」『太陽』10巻

11号1904.8.1

五里霧 ×MONS I EUR 樽目録第3版記載あり。[編年③1335]記載なし

→○MONSIEUR

俠女郎 ×1907年博文館出版。根拠は呉燕論文か。『編年史』未収録。

→○『英雄小説 大復讐』本郷書院1912所収

使用したもうひとつの小説目録は前出の樽目録第3版だ。陳大康目録には書かれていない原作について樽目録第3版からそのまま引き写しているからそれがわかる。

説部叢書版『賣国奴』の初版について注⑩がある。「民国12年12月」(版数不記)の奥付(版權頁)に「癸卯年十月初版」(222頁)とあるが実際の出版は1903(癸卯)年ではないと主張する。

1903年と書くのは陳大康『編年史』である。『編年史』を取り込んだ樽目録第10版から関連箇所だけを引く。

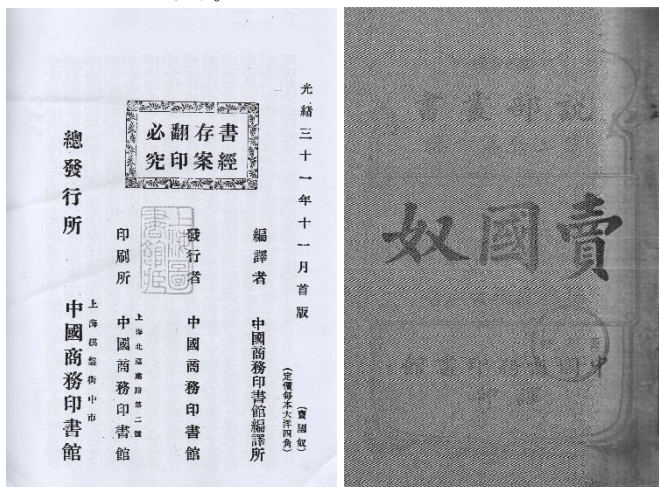
[編年②662]16回、日本登張竹風原訳、銭塘呉禱重訳、上海・⁷⁷商務印書館、光緒二十九年⁷⁸(1903)十月出版(注:説部叢書初集⁷⁹第十六編と誤る)

文娟は「癸卯年十月初版」と明示しているから陳大康『編年史』そのままではない。後の「説部叢書」初集本を自分で確認したものと思ふ。

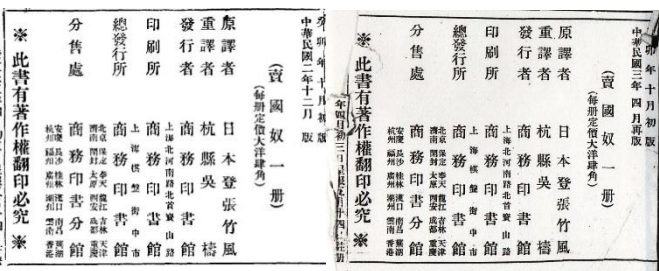
文娟は登張竹風『賣国奴』の雑誌掲載(1904)とその単行本刊行時期(同年)、『申報』の告知を傍証として挙げる。結果は1903年を否定し1905年3月を提出した。文娟の考え方は基本的に正しい。周囲の証拠を集めて考証することはいい。しかし一方で『賣国奴』そのものを探す作業が必要なのだ。そちらの方がより重要だということができる。

だいたい商務印書館「説部叢書」後版奥付に

は問題がある。つまり初集本リボン文様の奥付表示は信用できないことはわかっている。具体例を示す。『賣国奴』の元版タンポポ文様との初集本リボン文様の奥付を3種類(a b c)にかける。



a



b

c

a 元版タンポポ文様文様 第二集第六編 光緒三十一年十一月首版 上海図書館所蔵

b 初集本リボン文様 初集第16編 癸卯年十月初版/中華民國二年十二月版

c 初集本リボン文様 初集第16編 癸卯年十月初版/中華民國三年四月再版

初集本はいずれも「癸卯年十月初版」と表示する。陳大康はその記述を信じた。ゆえに『賣国奴』初版を光緒二十九年十月の「發生於本月但日期不詳之事件」欄(662頁)に配置したとわかる。後の初集本奥付にもとづいた陳大康の判断だろう。元版の初版本で確認したわけではないと思う。

だが元版タンポポ文様を見れば上記のとおり

「光緒三十一年十一月首版」である。こちらが事実だ。結果として文娟の指摘とほぼ一致する。「ほぼ」であって完全一致ではない。

『車中毒針』について一覧表で「(英)勃拉錫克著, 石井ブラック述, 今村次郎筆記」と表示する(217頁)。さらに説明して「英国勃拉錫克原著」を転訳したという(218頁)。つまり文娟の理解はこうだ。英国勃拉錫克の英文原著があり、それを石井ブラックが日本語で翻訳口述したものを今村次郎が筆記した。英語から日本語へ、それをさらに漢語に翻訳したから転訳になる。

樽目録第3版の「(石井)ブラック(HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック)演述、今村次郎」にもとづいていると思う。陳大康『編年史』はそこまで記述していないからそう推測する。違うというのであれば典拠を示してほしい。

そこに書いてある「HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック」には意味がある。それを無視して文娟は転訳したと判断したようだ。

石井ブラックはオーストラリア生まれで日本に帰化した。明治時代の日本で活躍した落語家であることは広く知られている⁹⁾。勃拉錫克とブラック(HENRY JAMES BLACK)、快樂亭ブラックはすべて同一人物にほかならない。ブラックが日本語で述べたものが原作だ。それを今村次郎が筆記した。結局のところブラックの日本語にもとづいて呉禱が直接漢訳しただけ。転訳には疑問符がつく。中国での調査はむつかしいのか。想像にもとづいて書かないほうがよい。

商務印書館と金港堂の合弁

商務印書館と金港堂の合弁を「1903年10月」(218頁)とする。正式な合弁開始は光緒二十九年十月初一日(1903.11.19)だ。文娟の表示は中国でよく見る新曆旧曆混用である。わかっていれば間違いではない。しかしまぎらわしい。併記するかどちらかに統一したほうがいい。

両社の合弁について注⑬がある。金港堂が「賄賂案」による苦境と当事者の困窮から逃れるために中国にやってきて投資先を探し商務印書館の株式に加入したとする(222頁)。

金港堂の名前を出しているのは珍しい部類にはいる。だいいち商務印書館と金港堂が合弁会社であった事実を知る研究者は少ない。陳大康が海賊版『官場現形記』製作の犯人に金港堂を指名したのは知られる*¹⁰。金港堂、商務印書館と李伯元の関係を把握していないところから生じた妄想であり珍説だ。中国において珍説が容易に発生して誰も指摘しない。それくらい日中合弁会社については認知されていない。合弁を指摘しているから文娟はそれに関する知識を持つ。そこは陳大康よりも優れている。ただしここでも典拠論文名を示していない。

金港堂は商務印書館と同額の出資をして合弁会社になった。その時、名称を変更せず従来からの商務印書館名を使用した。そこを理解しない研究者がほとんどだ。その結果が想像になる。あるいは研究者が考えるそうあってほしい願望をあたかも事実であったように述べる。すなわち日本の弱小出版社が醜聞によって逃れ中国の巨大な出版社である商務印書館に助けを求めたと考えたらしい。そう把握するのは誤っている。歴史の事実を知らない単なる幻覚である。

合弁の原因を「賄賂案(正しくは教科書事件)」のように説明する文章を読んだことがある。文娟はそこだけを切り取った。もとの論文が正しくない。だがそれを信じたようだ。説明が不足している。日本の出版社が「賄賂案」になぜ関係したのか。唐突にワイロ事件だといわれても理解する中国人読者はほとんどいないだろう。呉構を論じる文章だから合弁については説明を省略したとはいってほしくない。関連性が少ない事柄は書き込む必要はない。ましてや根拠のない俗説なのだからなおさらだ。

金港堂は教科書の編集発行で有名な日本の巨大総合出版社だった。社主の原亮三郎は以前か

ら中国大陸での出版業経営を考えていた。それを実行に移そうとしていたのが歴史的事実だ。具体的に動きはじめたのは1901年山本条太郎(原亮三郎の娘婿)が三井物産上海支店長に着任した後である。山本条太郎と商務印書館の人的関係があった。当時、商務印書館は経営の危機に直面していた。日本の巨大企業金港堂が中国の弱小出版社をわざわざ合弁相手に選んだのもこの人間関係が作用している。1902年ころの早い時期から金港堂と商務印書館の両社は合弁にむけて準備していた。

ところが金港堂は1902年12月の「教科書事件」に見舞われた。教科書会社の多数と政治家、官僚たちが教科書採択に関係する贈収賄容疑で逮捕された事件だ(教科書事件)。一方の商務印書館は失火によって自社が焼けた。双方に大事件があった。それによって予定していた合弁の実施が延期になる。ようやく正式合弁にこぎつけたのが新暦1903年11月なのだ。

「教科書事件」を金港堂と商務印書館の合弁原因にするのは正しくない。日本では専門書が刊行されているが文娟は目にしていないと思う。そういう意味では文娟にはこれから調査研究する余地が残っているということだ。期待している。そのおりに典拠を明記してほしい。

『薄命花』と『侠黒奴』

『薄命花』の原作については空欄だ。樽目録第3版がそうしているからだろう。第4版(2011)より原作を明示している。それに気づかなかった。当たり前のことだが資料について発言するならばそれなりの努力と準備が必要となる。

ズーダーマン(ドイツ)、モーパッサン(フランス)、シェンキエヴィチ(ポーランド)、マーク・トウェイン(アメリカ)、コナン・ドイル(イギリス)、ロシアではチェーホフ、レルモンツフ、ゴーリキーらの名前をあげて翻訳したとまとめる。当時としては見かけないも

の(218頁)で評価すべき訳業という文娟の指摘には納得する。

『俠黒奴』(雑誌初出は1906年)は尾崎紅葉『少年文学第19編 俠黒児』(博文館1893.6.未見)の漢訳だ。その英語原作が MARIA EDGEWORTH “THE GRATEFUL NEGRO” (“POPULAR TALES” 1804)である。



Open Library による

ジャマイカ島の黒人奴隷シーザーと妻クララは良い白人の主人に仕えていた。該書にある挿絵を見ると単純肉体労働に従事しているようには見えない。シーザーは上下の衣服を着ている。クララもそれなりの衣装だ。ただしふたりとも裸足ではある。紅葉『俠黒児』の挿絵はほとんど裸の黒人が描かれていて英文原書とは異なる^{*11}。

悪い白人の主人のもとにいるヘクター(シーザーの知り合い)は主人からの虐待に耐えかね

て奴隷全員とはかって白人に対する反乱を起こすことにした。シーザーは良い白人の主人のために一揆を思いとどまるように説得に出かける。だが激昂したヘクターのナイフに刺される。

原文では「死んで満足です」と彼はいった。「クララと一緒に埋めて下さい」「I die content, said he. ‘Bury me with Clara.’」(440頁。Open Library による)である。ただし傷は浅くまもなく快復した。

紅葉はそこを自分流に書き換えた。「「旦那様、これが御恩返し、」ノクラムーと一声叫びしが、敢無く息は絶えにけり。」(428頁。ルビ省略。国立国会図書館デジタルコレクション『紅葉全集』第3巻による)

エッジワース原作ではシーザーは生きており、紅葉翻案では死亡する。「これが御恩返し」という台詞は日本語訳題名『俠黒児』に結びついている。それは原作題名『黒人の恩返し THE GRATEFUL NEGRO』と無関係ではない。紅葉にしてみればシーザーは死去した方が小説的に盛り上がり終了するという考えだったのである。

文娟はその最後部分の書き換え部分をつかんで次のような解釈をした。原文のままを引用する(下線青は筆者)。

「『俠黒奴』原著結尾部分は、黒奴西查最終傷癒和妻子重圓、作者希望借此到達消除種族岐視之偏見的目的；但是尾崎紅葉の日訳本結尾是西查為報恩，在替主人擋刀之後因傷重不癒而死去，体现出一種為恩義而殉死的武士道精神，219頁

原作者が最後に登場して人種差別の偏見を除去するように希望していると書いている^{*12}。

引用符号を使用していない。また参考文献を提出しない。どこから見ても文娟による独自の個人見解の表明だ。しかし唐突に「武士道精神」が出てくるのはなぜなのか。紅葉の翻案を漢訳

したから日本の単語を使用したにしては違和感がある。というよりも既読感が湧いてくる。

注に示した崔琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以吳禱漢訳《俠黒奴》為中心」(2014)である。そこから引用する(下線青は筆者)。

The Grateful Negro 結尾部分、黒奴西査最終傷癒和妻子重圓、作者 Maria Edgeworth 現身、希望讀者能消除種族歧視的偏見。而《俠黒兇》的結尾是西査因傷重不癒死去、臨死仍惦记着為主人報恩。原作為消除種族偏見所做的努力，在這裡被一種近乎於壯烈的武士道精神所取代。35頁

文娟の文章に下線青をほどこした箇所が崔琦論文と重複する。

文娟はすでに2冊の著作を持っている。『縁与流変』(2009)と『文学場域変革中的交融共生』(2015/2017)^{*13}だ。

自分の文章と他人のものとは厳密に区別しなければならない。自分の著作を刊行している文娟にむかってわざわざ言うまでもないことだ。

周作人の言及

周作人が吳禱訳『賣国奴』に言及していることを紹介する。翻譯によって精神が変化し(精神尽変)、さらに個人意見を發表していると批判しているようだ(219頁^{*14})。

文娟が周作人の見解を紹介するのであれば彼の漢訳「俠女奴」(『女子世界』8-12期 甲辰7.1(1904.8.11)・刊年不記)に是非とも言及してほしい。

周作人の「俠女奴」は英文「アラビアン・ナイト」のアリ・ババを漢訳したものだ。40人の盜賊を退治した女奴隷モルギアナは幸福な生活をむかえて終わる。それが原作だ。ところが周作人はその結末を自分で書き換えてモルギアナを行方不明にしてしまった。悲劇的な結末へと

勝手に改竄したのだ。周作人自身が原作を自在に改作している。動かすことのできない事実がある。北京大学で報告した時からさかのぼること10年以上も前のことだ。周作人に吳禱を批判する資格はあるのか。萍雲女士という筆名で發表した作品である。周作人は誰も知らないと思ったのだろうか。

誤植ではないか

220、223頁注⑦に出てくる『嚳報』は『嚳報』ではなかろうか。文娟が明記していない引用元資料は[編年⑤2168]だ。それには『嚳報』第65号1911.4.8小説賃貸社第三次広告がある。『編年史』が正しいとすれば文娟が刊年を「1911年2月8日」とするのは誤記であろう。文娟が採用している新曆旧曆混用であれば1911年3月10日だ。旧曆では宣統三年三月初十日(1911.4.8)となる。違うというのであれば指摘してほしい。

四

【注】

- 1) 文娟「試論吳禱在中國近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.10.15
- 2) 次のとおり。
 - 署名なし「吳禱翻譯目錄」『清末小説から』第10号 1988.7.1
 - 吳 燕「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』第33号 2010.12.1
 -
 - 沢本香子「書家としての吳禱」『清末小説』第32号 2009.12.1
 - 樽本照雄「吳禱の漢訳チェーホフ」『清末小説』第33号 2010.12.1
 - 沢本香子「書家としての吳禱・補遺」『清末小説から』第100号 2011.1.1
 - 樽本照雄「吳禱の漢訳ゴーリキー(上)」『清末小説から』第101号 2011.4.1

樽本照雄「呉禱の漢訳ゴーリキー(下)」『清末小説から』第102号 2011.7.1

沢本香子「書家としての呉禱・補遺2」『清末小説』第34号 2011.12.1

以上は『清末翻訳小説論集(増補版)』2017収録

郭長海「天涯处处有芳草 錢塘海陽是兩家」『清末小説』第34号 2011.12.1

渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1

- 3) 趙霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以呉禱《小説月報》前期(1910-1920) 翻訳作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文學院 2013.9
- 崔琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以呉禱漢訳《俠黒奴》為中心」『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総第176期) 2014.3.15
- 徐從輝「談周作人的一組佚文」『新文学史料』2013年第3期(総第140期) 2013.8.22
- 呉曉樵「周作人对晚清德語小説訳作《賣国奴》的評價」『新文学史料』2014年第4期(総第145期) 2014.11.22
- 4) 神田一三「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号 2002.12.1。のち樽本『商務印書館研究論集』2006.12.15、『商務印書館研究論集(増補版)』2016.5.15電字版収録
- 5) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1
- 6) 『商務印書館図書目録(1897-1949)』北京・商務印書館1981
- 7) 登張竹風訳『賣国奴』金港堂書籍株式会社 1904.9.15
- 8) 樽本照雄「清末小説年表の最新成果——陳大康『中国近代小説編年史』について」『東方』2015年2月号(第408号) 2015.2.5
- 9) 伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』ちくま文庫 2005.5.10 明治探偵冒險小説集2
- 10) 陳大康「論近代小説伝播中的盜版問題」『文学



遺産』2015年第1期 2015.1.15

- 11) 李敏永「尾崎紅葉『俠黒奴』試論——*The Grateful Negro* との比較考察を通して」『藝文研究』第90号 慶應義塾大學文学会2006.6.1. 112頁
- 12) 原文は次のとおり。違うように思う。Our readers, we hope, will think that at least one exception may be made, in favour of THE GRATEFUL NEGRO. p. 441
- 13) 文娟『結縁与流変——申報館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2009.3、『文学場域変革中的交融共生——掃葉山房説部及雜誌刊行研究』上海大学出版社2015.12/再版不記、実際の刊行は2017.12
- 14) 周作人「文科国文門研究所報告」。文娟はここで1918年1月17日付『北京大学日刊』の原文から直接引用しているように注⑩をつける。正確ではないだろう。なぜなら呉曉樵が『北京大学日刊』の原文(徐從輝論文を参照した)について句読点などが間違っていると指摘しているからだ。ズーダーマン Sudermann を誤植して初出は Sudermum だという。文娟が引用しているのは呉曉樵が書き直した文章(136頁)からだと推測する。人名を正し原文にはないはずのカッコを使用しているからわかる。しかも呉曉樵が書き改めた「一經中国人訳為《賣国奴》」の「一」を写し忘れる。原文はもう少し丁寧に扱ってほしい。

陳大康『中国近代小説史論』の年表
——『編年史』との関係で

樽本照雄



陳大康『中国近代小説史論』（2018。略して『史論』。略号は[大康18]）^{*1}である。といっても全13章の本文には触れない。本稿は附録として収録されている3種類の「資料長編」に焦点を当てる。

資料3種に共通するのは題名の下4文字だ。内容は日本でいう年表を意味する。中国の用例では陳大康も使用している「編年」に該当するといってい。日本語に翻訳すれば新聞小説年表、雑誌小説年表、翻訳小説年表である。頭に近代をつけており辛亥までを対象とする。

そのもとになっているのは陳大康『中国近代小説編年史』（2014。略して『編年史』。略号は[編年]）全6冊^{*2}である。実物を見れば容易に理解できる。両者ともに1840-旧曆宣統三年十二月（1912.2）と時間を区切る。新曆になる中華民国成立後を少し含んでいるのも共通する。旧曆辛亥で区切ったからだ。

『編年史』と『史論』所収の年表を比較対照した。紹介しながら私の意見を述べる。

頁数の差と項目数

両者を並べて一見すればページという量的な差が大きいことがわかるだろう。『編年史』は全6冊だし同じ版型の『史論』は1冊だ。しかも『史論』の年表部分は1冊のうちの部分を占

めるにすぎない。

『編年史』の第6巻は索引だから除く。「導言：過渡形態的近代小説」が181頁ある。ノンブルを振りなおして年表本文は第1巻から第5巻の途中まで全2342頁という巨大さだ。

一方の『史論』は、「附録1 近代日報小説資料長編」521-706頁、「附録2 近代小説專刊資料長編」707-802頁、「附録3 近代翻訳小説資料長編」803-943頁の合計423頁にすぎない。「すぎない」というのは『編年史』と比較しての表現だ（約18%）。普通の出版物で423頁といえば立派な1冊の年表である。参考までに述べれば陳大康『中国近代小説編年』（2002）は版型も小さく本文303頁だった。内容も異なる。

『史論』年表はページ数だけから比較すれば『編年史』の約18%しか収録していないことになる。作品収録率が劣るように見えるかもしれない。しかし表面だけ見て判断すれば誤るのが普通だ。

収録された作品数に目を向ける必要がある。1作品を1件と数える。

具体的にいう。『編年史』は第1巻420件、第2巻1,072件、第3巻1,833件、第4巻2,512件、第5巻1,233件の合計7,070件である。創作

と翻訳を区別していない。新聞雑誌の初出から単行本までのすべてだ。阿英目録の約7倍ののぼる。

一方の『史論』は附録の年表3種類を合計して4,472件だ。『編年史』と比べて約63%という作品数になる。頁数で比較したときの約18%からすれば結果として3.5倍である。

注目すべきは小説件数だ。『史論』年表は収録作品全体からいえば『編年史』よりも2,598件も少ない。『編年史』5冊(1冊は索引)を基礎としているのだから簡略化の方向に編集したはずだ。それにしても両者ともに同じ時間を対象としていて2千件を超える収録作品数の違いは奇妙に思われる。

この2,598件という作品数の差こそ『史論』の附録年表が持つ基本的欠陥を露呈させている。

編集方針の変更

両書の変化を知るため先に『編年史』の編集方針を簡単に説明しておく。私が全頁を実際に点検して理解した範囲内であることはいまでもない。

創作小説、翻訳小説について発表順に記述するのが基本だ。そのばあい創作か翻訳かの区別はつけない。新聞雑誌に掲載されたものは実物に当たって確認したと思われる。それらは基本的に全部を取り込む。つまり連載の作品は第1回から途中の掲載も順を追って採録する。初出からのちに単行本化された作品も拾う。初版から重版までも収録する。そればかりか新聞に掲載された出版広告を集める。それで実質全5冊もの分量を必要としたのも理解できる。判明している日、月、年の順に膨大な作品が細かく記述されるから第6巻の作品著者索引は必須となる。ちなみに樽本編『清末民初小説目録』は電字版に切り替えてから全文検索が可能になった。ゆえに現在は索引を作成していない。

『編年史』から『史論』年表を見れば編集方針が大きく変えられている。3種類に分類した。

新聞、雑誌、翻訳小説である。すぐにその分類法について違和感が生じる。媒体と内容を区別することなく混在させているからだ。もうひとつ重要な疑問が出てくる。創作小説はどうなった。阿英目録は大きく創作と翻訳に2分類した。『史論』年表はそれと似ているが違う(後述)。

『史論』年表3種を見ていく。

○「附録1 近代日報小説資料長編」521-706頁——新聞掲載

新聞に掲載された小説を採取する。創作小説と翻訳小説を区別しない。連載開始と終了の年月日を記述するのみ。開始と終了が確認できない作品には注釈をつけてそう説明する。断言しないのがよい。

ここである名前に奇妙な漢字を出してくる。『神州日報』の龔叟に関連する。『編年史』は正しく表記する。ところが『史論』年表ではそれら著者名をわざわざ作字して間違う(1例は[大康18-667])。存在しない漢字だからここでは示すことができない。

○「附録2 近代小説専刊資料長編」707-802頁——雑誌掲載

雑誌掲載の小説を採録対象とする。こちらも創作と翻訳を区別しない。

点検していて私の注意を引いた事項をいくつか並べる。

[大康18-712]に省略部分がある。1893-1901年を収録しない。理由は不明。ところが翻訳小説年表ではその限りではない。不統一だ。雑誌部分には省略があるから要注意。

[大康18-787]に省略期間がある。[編年④1684]正月-1735頁の閏二月までに相当する部分を記載しない。

『十日小説』収録作品が『編年史』と一致しない。『編年史』で連載途中を未収録とした部分を[大康18]で補充記載しているからだ。

『編年史』では採録していた回目は『史論』で省略する。また作品によっては途中の連載を

省略していたりする(例:[大康18-812]「経国美談」『清議報』連載、[大康18-830]「俄羅斯国事犯」『大陸報』連載、[大康18-860]「空谷佳人」『東方雑誌』連載は第1回のみ)。不統一だ。

雑誌掲載の翻訳も収録するから附録3との重複が生じる。

『外交報』に掲載された作品の分類に問題がある。たとえば「一条鞭」は翻訳の部に収録する([大康18-836])。ところが雑誌の部(専刊)724頁には未収録である。『史論』年表の分類では雑誌(専刊)に採録した作品は翻訳の部でも重複して記録する方針だ。それから外れている。数は多くないがそういう不一致は気になる。

『揚子江白話報』は雑誌の部には未収録。翻訳の部には収録した。これも不統一だ。

雑誌掲載部分は相当量を省略しているように見える。こういう箇所があるとどうしても『編年史』と比較してしまう。刊行する意味が問われるからだ。

○「附録3 近代翻訳小説資料長編」803-943頁——翻訳小説のみ

新聞雑誌、単行本を対象にして翻訳小説だけを抽出している。そうすると取りこぼしが必要なければ翻訳ということで必然的に複数が重複する。つまり新聞雑誌で翻訳を採録するとそれが附録3にも重なって出てくる。

『史論』年表でも『編年史』と同様に原作者、原作品についての説明をしない。説明をしないのが陳大康の基本方針だとわかる。

説明不足を残したまま翻訳小説だけを特別扱いするのはなぜか。当然の疑問につながる。創作小説はどうなる。最後はここに着地するだろう。

大きな問題が生じているのは商務印書館の「説部叢書」「林訳小説叢書」に関係する。

商務「説部叢書」については清末元版(タンポボ文様)と民初初集本(リボン文様)を分ける必要があると以前に私は指摘した。清末時期を対象とする『編年史』ではもともと存在しな

い元版と民初の「林訳小説叢書」を掲げていた。それは間違いだ。商務「説部叢書」「林訳小説叢書」については専門家もほとんど知らない。ついでに言うと陳大康は「説部叢書」の初版刊年について後の初集本奥付にもとづいて記述しているようだ。初集本の奥付には誤りがあることに気づいていない。

その後に刊行された『史論』年表がどのように記述しているのか興味深く点検した。結果は大いなる落胆だった。

『編年史』では採用していた「説部叢書」(あるいは間違いの「林訳小説叢書」)を新著の『史論』年表ではきれいさっぱり削除している。例外1件(852頁「一束縁」)だけを消し忘れた。それを除いてすべて削除した。なんだろうか。これは資料作成の姿勢からいえば後退であるといわざるをえない。残念に思う。元版と初集の区別をする必要があるという指摘があると誰かから知らされたのか。気づいたのであれば問題部分を削除したのは賢明な処置だとはいえない。実物にもとづいて調べなおし正確な記述を目指すべきだった。『史論』年表は過去の誤りを訂正して深化させるよい機会だったのだ。判断を誤った。

商務「説部叢書」の削除はほかにも波及している。それとは関係のない時報館の「小説叢書」も削除する(846、847、851、860、863、881頁)。同じ例は群学社の「説部叢書」にも見える。不可解だ。

[大康18-904]で『月月小説』第2年第9期(周年紀典大增刊)と表記する。あたかも該誌該期が「周年紀典大增刊」そのもののように見える。そうではない。第2年9期に附録として「周年紀典大增刊」がある。不適切な記述だ。それが訂正されていない。

『編年史』では創作と翻訳を区別しなかった。ところが『史論』年表では翻訳小説だけを抽出した。それによって陳大康の誤解が明らかになったことがある。以下の作品だ。すべてホーム

ズの贋作であるのが奇妙な一致である。

「深淺印」[大康18-858]翻訳小説と誤る
 「黄金骨」[大康18-861]翻訳小説と誤る
 「殺婦奇冤」[大康18-870]翻訳小説と誤る
 「福爾摩斯最後之奇案」[大康18-875]翻訳小説と誤る
 「三捕愛姆生巨案」[大康18-897]翻訳小説と誤る/[大康18-908]同左

贋作ホームズは原作者不明の翻訳である可能性も否定できない。そういう文章を読んだことがある。そう主張するなら自分で探索してから書くべきだ。だが探し当てることができていない。中国人作家による創作だと考えていいだろう。

細々とした不一致点、誤った箇所は煩わしいだけだからこれ以上は触れない。それよりも『史論』年表最大の不可思議な点を指摘する。創作小説の単行本が採録されていない。いくつか例をあげて一覧表にする。

	新聞雑誌	単行本
恨海	—	×
胡宝玉	—	×
官場現形記	○	×
海賊版官場現形記	—	×
糊塗世界	○	×
庚子国変弾詞	○	×
海天鴻雪記	○	×
二十年目睹之怪現狀	○	×
老殘遊記	○	×
孽海花	○	×

新聞雑誌が初出の創作作品は採取している。上の○記号で示した。しかし最初から単行本で出た『恨海』、『胡宝玉』、海賊版『官場現形記』（『編年史』でも採録なし）は行方不明のまま。

陳大康は今回新しい分類を提示した。理由を説明せずに創作小説の単行本を排除した。採取の対象にしていない。結果としてそうなっている。

しかし創作の単行本でありながら30種弱の作品が例外的に記録される。たとえば『瓜分慘禍預言記』829頁、『閩中劍』861頁、『盧梭魂』839頁、『女界風流史』937頁、『上海遊騷録』917頁、『泰西歴史演義』859頁、『中国偵探案』853頁などだ。『編年史』から作品を抜くとき誤って混入したものだろう。点検が不足しているのではないか。

阿英目録は大きく創作と翻訳に2分類した。『史論』年表はそれに似ているが違う。新聞、雑誌、翻訳小説に3分類した意味が不明だ。ここを強調しておく。本来であればそれらにもうひとつ創作小説を加えるべきだった。それならいっそのこと阿英目録と同じく創作と翻訳に2分するだけで十分ではなかったか。記述の工夫次第で新聞雑誌と単行本は区別できるからだ。あるいは劉永文目録(2008、2011)のように新聞、雑誌、単行本に3分する方法もあった。『史論』年表はそれらとも異なる。陳大康は先行する小説目録には興味がなさそうに見える。参考文献を示さない。その結果は見るも無残だ。年表を作り直すのだから不足部分の補充、誤った箇所の修正は行なわれていると期待する。しかしごくわずかを除いてそれが見当たらない。新しく編集しなおした目的はなんだっただろうか。

『編年史』では作成していた索引だ。『史論』年表ではそれがない。創作小説の単行本を排除し索引もない。これらを含めて『史論』附録の年表は資料として利用するのはむづかしい。結論としてはあの詳細で完備した『編年史』に戻っていく。 罫

【参考文献】

樽本「清末小説年表の最新成果——陳大康『中国近代小説編年史』について」『東方』2015年2月号

(第408号) 2015. 2. 5。30-35頁。大要：『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014. 1) の書評。清末小説年表であり貴重な資料集でもある。次の注目点(瑕瑾3件)を指摘する。『繡像小説』発行遅延説、海賊版『官場現形記』、商務印書館版「説部叢書」。小さなキズは資料集としての価値を損なわない。

樽本「自爆する日中の研究者たち3完——清末小説と林訳をめぐって」3完『清末小説から』第132号 2019. 1. 1。「4 陳大康のばあい」がある

【注】

1) 陳大康『中国近代小説史論』北京・人民文学出版社2018. 3 国家哲学社会科学成果文庫。内容は以下のとおり。

序、

導 言：近代小説的歴史使命、

第1章 延続与潜動、

第2章 小説発展体系变化格局の初頭、

第3章 傅蘭雅徵文徴到了什麼、

第4章 “小説界革命”及其後之転向(附録：《新小説》出版時間辨)、

第5章 日報小説的興起及其特色(附録：近代刊載小説日報一覽表)、

第6章 小説專刊的發展歷程(上)(附録：《小説世界日報》考辨)、

第7章 小説專刊的發展歷程(下)(附録：近代小説專刊一覽表)、

第8章 翻譯小説在中国的出現、

第9章 近代小説理論变化的歷程、動因与結局、

第10章 晚清小説与白話地位的提昇、

第11章 小説盜版与市場漸趨有序、

第12章 近代報刊小説之轉載現象、

第13章 廣告：近代小説研究的重要支撐(附録：晚清的廣告小説)、

結 語、

附録1 近代日報小説資料長編、

附録2 近代小説專刊資料長編、

附録3 近代翻譯小説資料長編

2) 陳大康『中国近代小説編年史』北京・人民文学出版社2014. 1

《广肇周报》与林纾佚著《京华追忆录》

王 玉

笔者日前查阅民国时期在上海出版的报刊《广肇周报》发现，该报载有林纾两部作品，并且其中一部还是佚文。



图1：《广肇周报》封面

《广肇周报》(The Kwang Shao Weekly)现藏于上海图书馆，存28期，出版于1919-1920年间。该报版权页显示，报社设在上海宁波路11号^{*1}，经理者为周锡三，编辑者为罗伯夔，撰述

者为招伟民，发行者为广肇周报公司。主要栏目有论说、粤闻、岭南消息、文苑、谭丛、小说等，主要作者有伯夔、（陈）铁生、老兰等。

《广肇周报》每周一期，逢星期日发行。现存最早一期是第8期，1919年5月25日出版。由此可以推知，创刊号当在1919年4月6日。该报乃“赓续《岭南周报》办理”^{*2}。现存最后一期是86期，1920年11月28日出版。

从《广肇周报》刊发的内容可以看出，该报由广东旅沪人士创办，是上海广肇公所的刊物（也有文章指出，《广肇周报》是长江流域五省广东同乡的刊物^{*3}）。广，指广州府；肇，指肇庆府。1872年，广州、肇庆两府旅沪商民等共同建立广肇公所，会址位于宁波路，设有广肇义学、广肇医院、广肇山庄等^{*4}。《上海会馆公所史话》指出，通过1918年内部一次激烈斗争，广肇公所主张改革的成员占了上风……1919年新出版的《广肇周报》，内容也开始与公所改革派成员的思想进一步吻合，极力主张国家统一，发展民族经济，抵御外来侵略，深受同乡们的欢迎^{*5}。

《广肇周报》经理周锡三是广东三水人^{*6}，英文极好，先后在《民呼报》、《民吁报》、海关、商务印书馆编译所^{*7}、勤华贸易公司任职，1923年任广肇公所董事^{*8}。

《广肇周报》连载了林纾两部作品：一是小说栏目的《欧史遗闻·罗马克野司传》（15-22），英国莎士比亚原著，见《广肇周报》69期（1920年8月1日）、70期（8月8日）、71期（8月15日）、74期（9月5日）、76期（9月19日）、77期（9月26日）。二是谭丛栏目的《京华追忆录》（2-13），见于40期（1920年1月4日）、43期（1月25日）、44期（2月1日）、49期（3月14日）。《欧史遗闻》于1915年9月10日-10月3日在上海《亚细亚报》连载过。《京华追忆录》仅见于此，而且尚未被现有林纾研究资料著录。《京华追忆录》是文言体笔记，现存19则，全文如下：

京华追忆录（二）

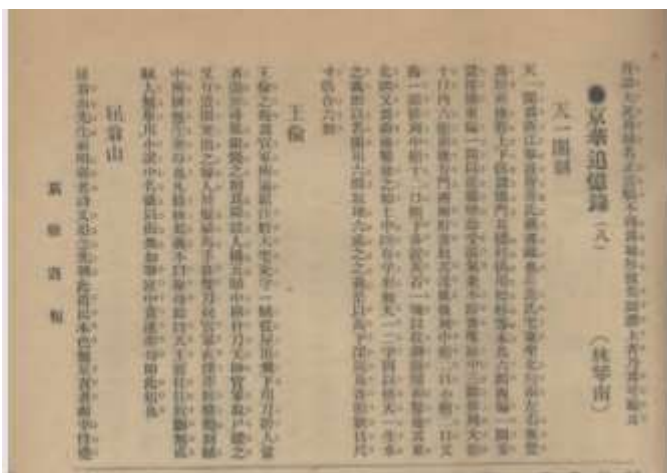


图2：林纾《京华追忆录》

塞楞额

塞楞额于孝贤皇后丧中剃头，且仅逾二十七日藩臬及全省官员一体薙发，而塞复自行检举。高宗大怒。时周学健、金文醇亦同时薙发。得旨，周学健从宽革职，免其拿交刑部，发往直隶，修理城工，效力赎罪（后以赃案并薙发之罪诛^{*9}）。金文醇亦加恩释放，发往直隶修城工，赎伊重罪。传谕塞楞额，止隨身行李，携带家人二名，星夜来京候旨。即将伊任所家货详细查明、封固奏闻，不得稍有遗漏，或有藏匿寄顿。及起程赴京，沿途一切举动查明具奏。寻赐死。呜呼！死固也，查抄家产则有不可解者（铁臼摸金耳^{*10}）。

高宗优于傅恒

金川之役，功属岳钟琪，而张广泗、讷亲于先后戮死，最后始以傅恒督师。高宗为之亲祭堂子，且祭吉尔丹纛。还至东安门外幄次，亲赐傅恒酒，命于御幄前上马。既出阜成门，命皇子及大学士来保等送至良乡，视傅恒饭罢乃归。然恒非将才，高宗虞其不胜，则日加优诏以褒美之。金川未复以前，已加双眼花翎，且屡斥该兵之无用。已而克金川者，岳军也，而高宗仍归功傅恒，封忠勇公。

张廷玉

张廷玉于世宗时，允其配享太庙，已为史贻

直所中。告归时，向高宗面求配享恩旨，乞允其请。高宗不悦。已因其不赴宫门谢恩严旨切责，且曰：朕前旨原谓配享餼大臣不应归田终老。今朕怜其老而赐之归，是特恩也。既赐归，而又曲从伊请，许其配餼，是待恩外之特恩也。乃在朕则有请必往，而彼则恬不知感。则朕又何为屡加此格外之恩，且何以示在朝之群臣？试问，其愿归老乎？愿承受配享恩典乎？令其明白回奏。张忧惶不知所为，及事少解，入朝谢恩，忧形于色。高宗怜之，仍赐诗以归，但革去伯爵耳。

清高宗不改服饰

巴克什达海、库尔缠力劝高宗改满洲衣冠，效有明一代服饰。高宗曰：“我辈果宽衣大袖，左佩弓、右挟矢，忽遇硕翁科罗巴图鲁劳萨挺身突入，我辈能御之乎？我国士卒初有几何？因娴于骑射，所以野战则克、攻城则取。天下盛称我兵曰：‘立则不动摇，进则不回顾也。’”呜呼！不动摇、不回顾二语亦言其入关时耳。迨豢养骄盈，八旗之兵谁能战者，三藩之乱、洪杨之变，非绿营奚功？然当日高宗之轻绿营，固不值一钱也。

传钞伪稿

乾隆十八年，以海内传钞伪稿一案，牵连数省，封疆大吏咸被严谴。稿为庐鲁生所撰，中有“五不解”、“十大过”名目，指斥高宗，借孙嘉淦之名风传一时。高宗闻而大怒，严旨逮捕。事肇于乾隆十五年七月，庐在刘时达家，虑高宗巡幸，办差赔累，冀其停止，遂成此稿，为天下传诵。高宗必欲尽究。已而得庐鲁生，凌迟处死。死时，庐方大病，有司乘其未死，奏请磔之。刘亦连坐。

京华追忆录（七）

野史之禁

彭家屏之狱，自供家藏明末野史《潞河纪闻》、《日本乞师》、《豫变纪略》等书，又供出《酌中志》、《南迁录》，并钞本小字书，系天启、崇祯年间政事等书。严旨责督抚搜刮，迨

复奏，但有明季《豫变纪略》刻本，余书经彭家屏之子彭传笏烧毁。传旨：烧毁各书是否彭传笏自出己意，抑系彭家屏传信？遂飭方观承亲带至京请旨。已而得旨，彭家屏父子斩监候，谓传写此书实天地鬼神所不容。彭家屏家产尽数入官，然尚未知书中为何语也。

陈安兆

富勒浑奏生员陈安兆妄著书籍，语多悖谬，将伊诗稿一部、著书二种，交学臣毛辉祖阅看，以词句狂放，应严加惩究，并将该教官查参。已而进呈其书，一为《大学疑思断》，一为《中庸理事断》，与朱注颇有异同；诗亦颇有牢骚语。得旨，此等笔墨之过，前人亦往往有之。况陈安兆所有，并不足称为著述。于此加以推求，转不足以服其心。富勒浑、毛辉祖俱着申飭。呜呼！当日满汉臣工一味谄谀，杀人媚人，宁止此一端耶？

顾汝修

顾汝修，奉命册封安南。见安南之衢，列象无数，则大惊却退，为高宗所知，严旨斥其丧胆，称为怯懦小夫。且归朝时，又移书诘责安南王，有临别赠言一语。高宗以为堂堂使臣，乃不识立言之体。书中斥该国筑馆旷野，多陈兵卫，谓为蔽人之明、塞人之聪，近于暧昧，皆不成语。上谕中嬉笑怒骂，颇可观也。

添髻记序

浙江齐周华既得罪，书中有谢济世赠齐《添^{*11}髻记序》。于是宋邦绥劾奏，奉旨飭查。时谢济世已死，即委员查究，谢家并无此稿，然廷议不能自承其误。遂取谢所著《梅庄杂著》一本，斥为乖谬怨悵。得旨：谢若在者，当明正其罪，以昭惩创。飭地方官将谢已刷之书及原刊板尽行查出销毁，勿使渐有遗漏。当日文字之狱，其可畏者如此。

日下旧闻

《日下旧闻》为秀水朱竹垞编。及乾隆三十八年，令福隆安、英廉、蒋赐棨、刘纯炜将朱氏所载各条逐一确覈。凡方隅不符记载、失实及承袭讹舛、遗漏未登者，悉行分类胪载，编为《日下旧闻考》。以于敏中综其成，每辑一门，以次进呈，并令载入《四库全书》，以重永久。

京华追忆录（八）

天一阁制

天一阁为浙江宁波府范氏藏书处也。在茁氏宅东，坐北向南，砖甃为垣，前后檐，上下俱设窗门，其樑柱俱用松杉等木，共六间。西偏一间，安设楼梯。东偏一间，以近墙壁，恐受湿气，并不贮书。唯居中三间，排列大橱十口，内六橱前后有门，两面贮书，取其透风，后列中橱二口、小橱二口。又西一间，排列中橱十二口，橱下各置英石一块，以收潮湿。阁前凿池其东，北隅又为曲池。凿池之始，土中隐有字形，如“天一”二字。因以悟“天一生水”之义，即以名阁。用六间，取“地六成之”之义。是以高下、深广及书橱数目尺寸俱合六数。

王伦

王伦之叛，为官军所逼，踞汪姓大宅死守。一贼从屋顶飞下，用刀斫人，当者尽靡，寻聚枪毙之，则为阳谷人杨五，贼中称朴刀元帅，官军取尸磔之。又有溃围突出之妇人，披发骑马，手舞双刀，向官军直扑，亦经枪毙，则贼中所称无生圣母也。凡绿林起义不曰圣母，即曰天王，而往往败衄无成。贼人无学，用小说中名号以徇众，如拳匪中黄莲圣母，即此类也。

屈翁山

屈翁山先生，前明遗老。诗文追念先朝，此遗民本色，无足责者。而李侍尧阿媚高宗，将各种著述黏签进呈，以为逆书，并请将藏书之屈稔须、屈昭泗问拟斩决。得旨：屈大均诗文久经毁禁，屈稔须、屈昭泗不必治罪。可见当日满族之

仇汉族，亦汉族自戕其类以贡谏耳。今日翁山之集仍存于世，而李侍尧世已无知之矣。小人之枉为小人，于君子初无损也。

勤有堂宋槧

勤有堂在我闽之建阳县，余姓之先业也。余氏自北宋时即以刊书为业，购选纸料，印记“勤有”二字，纸板俱佳，是以建安书籍盛行。至勤有堂名，相沿最久。宋理宗时，有余文兴，号勤有居士，亦系袭旧有堂名为号。后此余氏所刻称绍庆堂，即勤有堂故址也。清高宗藏米芾墨迹，其祇^{*12}幅有“勤有”二字，不知所出。后检宗刻杜诗，有皇庆壬子刊于勤有堂，询知为闽中余氏之板本。然则余氏之槧，诚不数见之珍物矣。

四百里驰驿取禁书

乾隆辛酉谕军机大臣等：朕昨检阅各省呈缴应毁书籍，内有僧澹师所著《遍行堂集》，系韶州知府高纲为之制序，兼为募贖刊行。查澹师名金堡，明末进士，曾任知县，复为桂王朱由榔给事中，当时称为五虎之一，后乃托迹缙流，藉以苟活。其人本不足齿，而所著诗文多悖谬字句，自应销毁。高纲身为汉军，且高其佩之子，世受国恩，乃见此等悖谬之书，恬不为怪，匿不举首，转为制序募刻，其心实不可问。使其人尚在，必当立真重典。因令查阅其家收存各种书籍。今于高纲之子高秉家查有陈建所著《皇明实纪》一书，语多悖谬，其书板自必尚在粤东，着传谕李侍尧等，速即查明此书板及所有刊印之本，一并奏缴。又查出《喜逢春传奇》一本，亦有不法字句，系江宁清笑生所撰。曲本既经刊布，外间必有流传。该督抚等从前未经查明，想因曲本搜辑不到耳。一并传谕高晋、萨载于江宁、苏州两处，查明所有刷印纸本及板本，概行呈缴。高纲为澹师作序，朕无意中阅及，可见天理难容，自然败露。其子收藏应毁之书，即或前此未经寓目，近来查办遗书，屡经降旨宣谕，凡缴出者概不究其已往。今高秉仍然匿不呈缴，自有应得之罪，已交刑部审讯。此专因高纲为八旗大臣子孙，其家藏有应毁

之书，不可不示懲儆。至陈建在天启间，即清笑生亦似明末时人，其两家即有子孙，不必深究。将此由四百里一并谕知之。呜呼！遗书之祸，一烈至此。宜乎！今日修史，无实录足考也。

京华追忆录（十三）

绵亿太监

绵亿，皇孙也。其太监牵羊进城不纳税，且殴关吏，裂其告谕。司关者大怒，将陈奏。阿文成为绵亿之外大父，急以人告司关者，调停其事，得不论。高宗怒，令文成明白回奏。文成引过。高宗降谕：阿桂在军机处行走多年，朕办理庶务，伊所深知，岂遇此等事，朕能曲为宽宥耶？伊系满洲首府，为绵亿福晋之祖父，何可如此瞻徇。阿桂应得公爵及宝石顶双眼花翎、四团龙褂、金黄带，本应撤回，但伊于办金川一事，颇著劳绩，朕念此，施恩不从严治罪，著罚公俸十年，并不必在总谕达上行走。

尹嘉铨为父请谥

尹嘉铨为尹会一子，乃为其父请谥，并请与汤斌、范文程、李光地、顾八代、张伯行从祀圣庙。高宗大怒，降敕曰：汤斌在皇祖时曾经侍读理密亲王，乃不能尽心辅导，以致王纵欲败度，终于废黜，于保傅之义有亏。至范文程，本系明季诸生，臣事我朝，致身通显，虽非如洪承畴等身事两朝可比，然于纯儒品节，不无遗议。若李光地，于耿逆时，遣人赍送蜡丸告变，外间传有不与陈梦雷一同列名之事，于公论亦未见孚。至顾八代，不过通晓翻译满汉文义，居官纯谨，本无行谊过人之处。又张伯行虽操守廉洁，亦人臣职分，当然其参奏噶礼一案，实因噶礼欲寻其衅，势难两立，因先发以为自全之计，不得以其讲学轻议入祀。尹会一从前经朕赐诗奖励，伊于巡抚任内，亦仅循分供职，后因不能胜任，改用京员，非汤斌诸人可比。今尹嘉铨乃敢妄称已在德行之科，丧心病狂，毫无忌憚。尹嘉铨革去顶带，拿交刑部治罪。呜呼！以尹嘉铨之故，乃使汤、张

诸公均蒙申斥。一言不智，流毒乃至此哉！

尹嘉铨罪状

尹嘉铨既为父请谥而得罪，搜检其家，有《朋党论》一篇，中云：“朋党之说起，父师之教衰，君亦安能独尊于上哉。”廷旨斥其颠倒是非、颠悖圣制。且其书又有“为帝者师”，廷旨斥其俨然以师傅自居，无论君臣大义，不应如此妄语，即以学问而论，内外臣工，各有公论，尹嘉铨能为朕师傅否？又其书有《名臣言行录》一篇，如高士奇、高其位、蒋廷锡、鄂尔泰、张廷玉、史贻直，悉行胥列。伊托言仿照朱子《名臣言行录》，朱子所处当宋朝南渡式微且在下位，其所评鹭尚皆公当。今尹嘉铨乃欲于国家全盛之时，莠言乱政。又尹嘉铨在山东藩司任内，面求赏戴花翎，且敢于朕前肖述伊妻言状，称不得赏即无颜相见，毫不知耻。而朕之深鄙其人，实从此始也。至其托言梦中神人告以系孟子后，身当传孔子之道。又朕御制古稀说，伊竟自号古稀老人，且欲娶年逾五十之处女为妾。种种谬出乎情理之外。天理昭彰，可为天下盗窃虚名、妄行异议者之戒。伊俯首伏罪，自认为欺世盗名之小人，恳求立置重典，核其情罪，即于磔诛，亦所应得。尹嘉铨著加恩免，其凌迟之罪，改为处绞立决。其家属一并加恩免其议坐。

乾隆乙巳千叟宴

高宗以五十年国庆赐千叟宴于乾清宫。亲王、郡王、大臣官员、蒙古贝勒贝子公台吉、额駙、番部、朝鲜国使暨士商兵民等年六十以上者三千人，皆入宴。礼成，高宗启座，命以千叟宴联句，颁赏如意寿杖、绘绮貂皮、文玩银牌等物有差。御制依圣祖元韵，诗曰：抽秘无须更骋妍，惟将实事纪耆筵。追思侍陛垂垂日，讶至当轩手赐年。君酢臣酬九重会，天恩国庆万春延。祖孙两举千叟宴，史册饶他莫并肩。

林纾是福建闽县人，为何会在广东同乡刊物上发表作品？笔者以为，一种可能就是转载。

《广肇周报》上刊登的不少小说都不是首发，比如李怀霜《炙蛾灯》。林纾的译作《欧史遗闻》也属于这种情况，这篇小说早在1915年就发表过。《京华追忆录》是否也属于转载，目前不能断定。另一种可能是约稿。1916-1918年，《广肇周报》经理周锡三在商务印书馆任职，而林纾作品多数在商务印书馆出版，他俩认识也很正常。由于《京华追忆录》是第一次被发现，约稿的可能性比较大。由于馆藏不全，目前能看到的《京华追忆录》只有（二）、（七）、（八）、（十三）四章19则。《京华追忆录》有可能连载到第十五章^{*13}，即使只连载到第十三章，总数也有60则左右。林纾虽然以翻译小说闻名于世，但也创作了《畏庐漫录》、《畏庐琐记》、《畏庐笔记》等数种文言笔记（小说），取得很大成就^{*14}。林纾创作笔记（小说）的原因，他在《畏庐漫录·自序》中明确说过，“余伏匿穷巷，即有闻见，或且出诸传说，然皆笔而藏之。能否中于史官，则不敢知，然畅所欲言，亦足为敝帚之簞”^{*15}。《京华追忆录》是林纾晚年的笔记作品。从现存篇目来，《京华追忆录》主要写清宫旧事，不少是关于文字狱的史料。以《四百里驰驿取禁书》为例，本则笔记内容主要是《将高秉交部议处陈建及清笑生两家子孙均可不必深究谕》，应该是林纾从军机处档或《东华录》等史料中摘录的^{*16}。可以说，《京华追忆录》的发现，对于研究林纾的文言笔记（小说）创作成就有着重要的意义。

四

【注释】

- 1) 还有资料显示，《广肇周报》位于美租界武昌路（北四川路西），载徐珂：《上海商业名录》，商务印书馆1921年版，第138页。
- 2) 《启事》，《广肇周报》1919年第8期，第17页。
- 3) 郭绪印：《老上海的同乡团体》，文汇出版社2003年版，第467页。
- 4) 张宪文等：《中华民国史大辞典》，江苏古籍出版社2001年版，第128页。
- 5) 潘君祥等：《上海会馆公所史话》，上海人民出

版社2012年版，第66页。

- 6) 《上海总商会组织史资料汇编》（上册），上海古籍出版社2004年版，第387页。
- 7) 谢菊曾：《十里洋场的侧影》，花城出版社1983年版，第45页。
- 8) 宋钻友：《广东人在上海（1843-1949年）》，上海人民出版社2007年版，第86页。
- 9) 括号中内容应为编辑所加。
- 10) 此处的“铁”应是《广肇周报》重要作者陈铁生。陈铁生（或称铁笙），广东新会人，曾任《天铎报》编辑、精武体育会音乐部主任和出版总编辑。见习文等：《上海群众文化志》，上海文化出版社1999年版，第396页。
- 11) 此处的“淆”应为“添”之误。
- 12) 此处的“祇”应为“纸”之误。
- 13) 《京华追忆录》（十三）刊于第49期《广肇周报》，第50、51期《广肇周报》无馆藏，而第52期《广肇周报》上已不见《京华追忆录》。
- 14) 张振国：《晚清民国志怪传奇小说集研究》，凤凰出版社2011年版，第278页。
- 15) 林纾：《畏庐漫录》（一），商务印书馆1923版，第1页自序。
- 16) 参考《清代文字狱档》（第3辑），北平故宫博物院、国立北平研究院1931年版，第2页。

（作者通讯处：《上海行政学院学报》编辑部。邮编：200233）

清末小説から

- 馬 雲○『中国近現代人文幻想小説研究』北京・中国社会科学出版社2018. 8
- 陳 平原○『触摸歴史与進入五四』北京大学出版社2018. 10
- 董 仁威○『中国百年科幻史話』北京・清華大学出版社2017. 12

- 李 敏永○尾崎紅葉『狭黒奴』試論——*The Grateful Negro* との比較考察を通して 『藝文研究』第90号 慶應義塾大學文学会2006. 6. 1
- ミカエル・ゴメズ・グタールト著、田中未来訳○『ドン・キホーテ』の著者、林紓 『群像』第72卷第12号 2017. 12. 1
- 周 越然○『書書書』哈爾濱・北方文藝出版社 2017. 5
- 陸 国飛○『清末民初翻譯小説目録(1840-1919)』上海交通大学出版社2018. 8
- (『清末民初翻譯小説目録(1840-1919)』)序 同上
- 季 凌婕○如何風刺——*Gulliver's Travels* 晚清中訳本《海外軒渠録》研究 『翻譯史研究』2017 上海・復旦大學出版有限公司2018. 11
- 黄 若沢○探索新社会——北京基督教青年会与《新社会》旬刊的翻譯活動 『翻譯史研究』2017 上海・復旦大學出版有限公司2018. 11
- 楊 焄○“哎呀，聰聰這小孩子”——安徒生童話在中国的推介与翻譯 『文匯學人』(第376期) 2019. 1. 18
- 山根祥子○ドーデの短篇小説の英語翻譯——『最後の授業』 『地球社会統合科学研究』創刊号 九州大学院地球社会統合科学府 2014. 9. 10
- 葉 依群○『《域外小説集》の生成与接受』杭州・浙江大学出版社2018. 5
- 林紓 上海書店出版社編○『林紓訳文全集』全47冊 上海書店出版社2018. 3
- 上海書店出版社○(『林紓訳文全集』)出版説明 同上
- 吳 興文○(『林紓訳文全集』)序言 同上
- 郭丹、朱曉慧主編『林紓研究論集』北京・九州出版社2018. 6
- (『林紓研究論集』)前言 ……吳 仁華
- 浅析林紓的“畏天”人格 ……李 景端
- 論林紓的愛國情懷 ……祁開龍、庄林麗
- 林紓与杜亜泉 ……王 勇
- 林訳及創作与五四白話運動 ……楊 玲
- 桐城派的別樣風景——以嚴復、林紓為中心
- 論林紓的韓柳觀 ……沈文凡、李佳
- 林紓軼聞《周莘仲広文遺詩・引》の発現与紹介——兼談汪毅夫先生台湾近代文学研究的特点 ……庄 恒愷
- 從林紓《畏廬瑣記》看民間信仰的世俗化特点——以東岳崇拜和土子祈夢為中心 ……庄 恒愷
- 從《修身講義》論林紓的教育理念与教学特色 ……張 麗華
- 功名早澹北山文——林紓自撰墓聯意涵試析 ……吳 仁華
- 曲折解神通——論林紓对韓愈与書贈序的解詁法 ……林 明昌
- 外質而中膏，声希而味永——林紓《蒼霞精舍後軒記》細讀 ……郭 丹
- “風趣”“情韻”“神味”——林紓論古文审美欣賞 ……張 勝璋
- “意境者，文之母也”——林紓論古文意境 ……張 勝璋
- 林紓的語言觀 ……林 天送
- 論林紓对現代散文理論的独特影響 ……歐明俊、程玲
- 論林紓对中外小説芸術的比較研究 ……韓 洪拳
- 林訳言情說的諸種模式及其意義 ……付 建舟
- 林紓訳文語料庫創建及其翻譯風格研究 ……戴光榮、左尚君、黄志娥
- 嚴復教育思想綜論 ……孫 漢生
- 知識考古与歴史重詁——編撰一部《林紓年譜長編》的構想 ……張旭、車樹昇
- 百余年(1897-2013)林紓研究概況 ……肖 志兵
- 重新認識林紓——《林紓讀本》序 ……吳 仁華
- “走進林紓”——開展中華優秀傳統文化教育的特色實踐 ……吳 仁華
- 区域文化資源轉化為校本課程的探索實踐——以“走進林紓”課程為例 ……吳娟、祁開龍